学術論文

かつて木曽馬と過ごした木曽の人々における馬に対する思い —デイサービス利用者ならびに最後の伝統的飼育者からの聞き取り—

高須正規（たかす　まさき）
1976年，愛知県生まれ。2006年，岐阜大学大学院連合獣医学研究科修了。2007年，岐阜大学 応用生物科学部 助教。2010年，同　准教授，現在に至る。木曽馬をはじめとする日本在来馬の保存に関する研究を進めている。

高須正規[1]*，千頭　聡[2]

[1] 岐阜大学応用生物科学部共同獣医学科（*takasu@gifu-u.ac.jp），
[2] 日本福祉大学大学院国際社会開発研究科

要約

木曽馬は長野県木曽地域から岐阜県東濃地域で飼育されてきた日本在来馬の1つである。戦後，生産性や経済的な効率が重視されるようになり，木曽馬は長く木曽で営まれてきた伝統的な生活とともに姿を消していった。木曽馬は，地域の遺伝子資源として，また木曽の文化を反映する生きた文化財としての価値を持つことから，今後も保存していく必要があると考えられる。しかし，25年も生きる家畜である木曽馬を単に理想や理念のみで飼育し続けることは困難である。木曽馬を残していくためには，これまでの「木曽馬の文脈」を踏まえつつも，時代に沿った新たな文脈に基づいた木曽馬の価値を作っていく必要がある。本研究では，新たな木曽馬の文脈を構築し，これからの木曽馬の保全を進めていくための前段階として，かつての木曽馬の文脈を明らかにすることを目的とした。そこで，木曽町社会福祉協議会の協力を得て，戦後を木曽で過ごされた方々から馬との生活を聞きとった。これに加え，最近まで馬とともに生活してきたMさんから，木曽馬との生活を聞き取った。デイサービスでは，利用者の方々から「馬は宝だ」，「とても可愛かった」，以外の言葉を聞くことはなく，馬との生活に関してはほとんど語られなかった。これは，開田村においては馬との生活が当たり前であり，特別なことではなかったこと，また，開田では誰もが等しく，慎ましい生活を営んでいたことを示唆していると考えられた。このような利用者らの語りは，生活のために木曽馬を飼育してきた人々が，同じく生活のために木曽馬を手放したことを，今の私たちの価値基準で批判できないことを教示していた。Mさんのインタビューからは，馬を飼うことがMさんにとって生きることであり，馬飼いであることがMさんのアイデンティティであったことが示唆された。また，Mさんは失われつつある地域において伝統的な生活を営むことで，旧家を継ぐ者の矜持を保っていたように感じられた。これらのことから，木曽馬は，木曽の人々とともに長い年月を過ごし，「木曽馬」となったと考えられた。しかし，この木曽馬の文脈は，戦後，社会の変遷とともに大きく変化した。本研究では，時代に沿った新たな木曽馬の文脈を探っていくための基礎となる，かつての木曽馬の文脈の一端が明らかにできた。

キーワード：聞き取り，木曽馬の保全，木曽馬の文脈

はじめに

木曽馬は，長野県木曽地域から岐阜県東濃地域で飼育されてきた日本在来馬の1つである。他の在来馬と同様，戦後の社会変遷に伴い，その数は減少した[1)]。現在木曽馬は，木曽馬の里を中心に約150頭が残されているのみである。

かつて木曽の家々では，通常，牝馬が2頭，多い家では3，4頭が飼育されていた。木曽の家では，厩が「建て込み」になっており，人と馬が同居していた。通常，南側のあたたかな場所に厩を作り，馬を大切に育てていた。木曽では，馬を飼うことで堆肥が得られ，土壌を改良できた。また，馬を使うことで田畑を耕せた。さらに，子馬を売ることで貴重な現金収入を得られた。これらのことから，木曽馬は木曽での生活に欠かせない家畜であった。木曽において馬は宝であり，人々は

馬のおかげで生活できたと言っても過言ではなかった（図 1）。このことを，黒田は，「馬をどこまで大切に飼育するかによって，その家の盛衰が左右された。馬のおかげで生活できるので，『馬様だ』，『馬明神だ』という観念が木曽谷農家の人を支配していた」と述べている[2)]。また，元開田村村長・初代木曽馬保存会会長の伊藤正起氏は，「百姓は馬のおかげで生きていた，つまり，人間が馬に生かされていたようなものなので，嫁が亭主より馬を大事にしたというのも，まるっきり作り話ではない」と語ったとされている[3)]。これらを裏付けるように，木曽には，馬籠，駒ヶ岳など，馬にちなんだ地名が多くみとめられる。また，開田高原末川の丸山馬頭観音，大桑村の伊奈川観音，旧日義村の渡沢観音など，多くの馬頭観音がみとめられる。

木曽における馬産は木曽代官 山村家の馬政とともに発達した[1,2)]。慶長 5 年（1600 年），関ケ原の合戦で東軍に味方した山村良候が代官に命じられた後，山村家は明治まで 13 代 274 年間，木曽を支配した。山村家 2 代甚兵衛良勝は，二条城で家康に謁見の際，家康から「木曽の鷹と馬のどちらかを与える」と言われ，馬を選択した。元和 3 年（1616 年），木曽が尾張藩領となると，木曽では毛附馬制度により徴収した年貢を藩へ納めるようになった。その後，木曽は馬産地となり，17 世紀後半には木曽に 1 万頭の馬がいたと考えられている[1)]。明治になると国の意向により木曽馬の改良が進められた。このころの記録は，昭和 2 年（1927 年）の福島町大火によって焼失しており，詳細は判らなくなっている。大正期になると，さらに木曽馬の改良が進められた。大正 5 年（1916 年）には馬匹去勢法が制定され，種牡馬以外の牡馬は明け三歳の春に去勢されることとなった。昭和 14 年（1939 年），種馬統制法が制定され，地域ごとに馬産方針が定められた。木曽は小格輓馬の産地に指定され，「概して体質強健なるも粗野矮小なるを以て地底（ママ）なる中間種，種牡馬を共用し体幅骨量の増加に努め堅実なる少格輓馬の生産を期すべし」という指示にしたがって改良されることとなった。ここで，種牡馬はすべて中間種系に置き換えられ，純粋な木曽馬はほとんど見られなくなった。昭和 21 年（1946 年），終戦から間もなく，長野県馬匹組合連合会によって木曽馬振興対策協議会が開催され，木曽馬の保存登

図 1.　木曽の人々と木曽馬
木曽馬は地域の生活資源として大切にされてきた（木曽町　坂口純一氏提供，許可を得て掲載）

録事業について協議された。ここで本来の木曽馬に類似した体形をしたもの248頭を選択し，体格を測定した。これにより新たな木曽馬の登録審査基準が決定された。昭和25年（1950年）春，長野県更埴市八万の武水別神社に鹿毛の明け12歳の純系木曽馬・神明号が御神馬として奉納されていることが知らされた。早速，この馬を払い下げ，種牡馬として共用した。翌26年（1951年）4月8日，純血木曽種鹿山を母に，第三春山号が誕生した。第三春山号は，昭和50年（1975年）に明け25歳で亡くなるまで，多くの子孫を残し，木曽馬の祖となった。木曽馬の祖となる第三春山号による戻し交配が進められ，木曽馬の復元が進められた。しかし，機械化が進んだ昭和40年代になると木曽馬の需要はなくなり，馬は食肉用に廉価で取引された。馬を手放した農家は，替わりに和牛を飼育した。これによって，昭和40年（1965年）に510頭飼育されていた馬は，昭和44年（1969年）には120頭となり，木曽から馬が消えていった。不要家畜となった馬の減少は止まらず，昭和50年（1975年）には種牡馬1頭，雌馬32頭のみとなった。

昭和44年（1969年），開田村村長であった伊藤正起氏を中心に，木曽馬と暮らし，馬への愛着を持つ人々によって木曽馬保存会が結成された。この会によって，木曽馬の保存が進められ，昭和57年（1982年）には，一部の木曽馬が長野県の天然記念物に登録された。平成2年（1990年），国のジーンバンク事業のため，木曽馬3頭（水清，黒百合，宝春）が家畜改良センター十勝牧場へ送られた。ここで，他の在来馬と同様，木曽馬の個体ならびに凍結精液の保存が進められた。

平成6年（1994年），木曽馬保存の基幹施設である開田高原振興公社「木曽馬の里」が造成された。現在，「木曽馬の里」では，種の保存のため，30頭を超える木曽馬が飼育されている。ここは，木曽馬の飼育繁殖施設としてだけでなく，木曽町の重要な観光施設としての役割を果たしている。平成21年（2009年），日本獣医生命科学大学，向山明孝客員教授を委員長とした木曽馬保存検討委員会が作られた。これにより，木曽馬の保全生物学的知見の解明が進められた。これら長年の努力が実り，木曽馬は150頭前後まで回復し，現在に至っている。しかし，未だ木曽馬の集団サイズは小さく，安心できる状況ではない。

生物多様性の保全を進めるにあたり，宮川は「モノとしての対象生物自体をどれだけ，どのように残すのかといった硬直化した目標そのものよりも，その生物が担ってきた文脈や関係が大切である[4]。また，一般論やグローバルな価値を鵜呑みにするのではなく，頭から否定するのでもなく，自分たちの地域の文脈に埋め戻すことにより，「大きな物語」を飼いならし，地域のなかで再文脈化を図ることが重要である[4]」と述べている。しかし，生物をモノとして捉える傾向にある自然科学者が生物多様性の保全に携わることが多いことから，「生物多様性」が持つ人文社会学的側面は軽視される傾向にあり，このことが生物多様性の保全を難しくさせていると考えられている[4]。

木曽馬の保存研究も，遺伝学や繁殖学といった自然科学分野が中心に行われてきた[5-8]。たしかに，木曽馬を保存するためには，モノとしての木曽馬を残す方策を考えることは重要である。しかし，人手や費用をかけず，25年も生きる家畜である木曽馬を飼育し続けることは困難であることから，単に理念や理想を語っても問題は解決しない。このため，木曽馬の生物学的な理解を基盤とし，これまでの地域における人々と馬との関係，すなわち「木曽馬の文脈」を踏まえたうえで，時代に沿った新たな文脈に基づいた木曽馬の価値を作っていく必要がある。

本研究では，新たな木曽馬の文脈を構築し，これからの木曽馬の保全を進めていくための前提として，かつての木曽馬の文脈の一部を明らかにすることを目的とした。このために，昭和30年代まで木曽で馬との生活を送ったデイサービス利用者ならびに最近まで木曽馬との生活を送ってこられたMさんから，かつての木曽における馬との生活を聞き取った。

聞き取り対象と方法

戦後を木曽で過ごされた方々から馬との生活を聞き取るために，木曽町社会福祉協議会の協力を得て，デイサービスにてインタビューを行った。事前に社会福祉協議会へ訪問の主旨を伝え，主旨に合致した利用者が集まる日にデイサービスを訪問した。デイサービスでは，木曽において馬と生活を共にされていた利用者6名，施設職員2名のグループに対してインタビューを行った。デイサービス利用者は，すべて80歳以上の女性であった。

これに加え，最近まで馬とともに生活してきたMさ

図 2.　伝統的な木曽の家屋と木曽馬の飼育
玄関のすぐ左側に馬屋がある（A，B），厩の内部には馬が外を見られる窓がある（C），その窓から外を見る馬（D），馬屋で生まれた子馬と親馬（E，F）（田澤佳子氏提供，許可を得て掲載）

んから，木曽馬との生活を聞き取った。80 代の M さんは，地域の旧家の出身で，中学を卒業後，営林署の作業員として 40 年過ごされた。営林署では，平日，山の寮に入り，週末に帰る生活をされていた。M さんの家は，天保年間（1830 年から 1844 年）に建てられたと言われ，厩と家屋が一致する作りこみ馬屋である[2]（図 2）。M さんの家は 300 年続いた庄屋の家であり，M さんはこの家に対して先祖からの責任を感じられていた。M さんは，この家に奥様と 2 人で暮らしておられ，他県にご長男家族が住まわれている。

なお，M さんおよび対象者には本研究の目的および内容を説明のうえ，本論文への掲載に対して同意を得ている。

結果と考察

1. デイサービスでの聞き取り

デイサービスを訪問するにあたって，馬が少なくなっていった昭和 30 年代から 60 年近く経ってはいるものの，利用者の方々から馬との思い出を聞くことができると考えていた。しかし，予想に反して，利用者の方々から「馬は宝だ」，「とても可愛かったよ」，以外の言葉を聞くことはなかった。

デイサービスではグループでのインタビューとなったため，個人的な思い出を聞くことが困難であった。また，十分に信頼関係，いわゆるラポールが形成されていない状況で，個々人のプライバシーに踏み込むことは難しく，詳細な背景を明確にすることはできなかった。さらには，60年も前のことを高齢者へ聞き出すことの無理があった。加えて，過去の生活は，当人達にとって話したくないものであった可能性も否定できない。しかし，馬との生活がほとんど語られなかったことは，開田村においては馬との生活が当たり前であり，特別なことではなかったこと，また，開田村では誰もが等しく，慎ましい生活を営んでいたことを示唆しているとも考えられた。利用者の方々は，共通して「年に1回来る活動劇」の話を語り，誰もが講談者の身体的特徴，雰囲気，語り口を鮮やかに語っていた。利用者からは「馬の交配ですら楽しみの1つ（92歳女性）」であるほど「楽しみの少ない生活であった」と語られた。

利用者からは開田村の社会変遷を示唆する話を聞くこともできた。昭和初期までは開田村は閉ざされた地域であり，情報やモノの流入は限られていた。唯一，教員が外からの者であった。戦後になると伝統的な生活を送っていた木曽にも様々な情報やモノが入るようになっていった。このころの思い出として，開田村に電話が設置された時のことが語られた。ある利用者は，「電話で話をするのが恥ずかしくてね。モシモシの後に何もいえなかったよ。開田言葉が恥ずかしくて」と語っていた。

昭和40年代になると機械化が進み，木曽馬は不要な家畜となっていった。また，この時，食肉需要が高まったことから，多くの農家は馬を手放し，替わりに，より利潤が得られる牛を飼育するようになっていった[1)]。「牛よりも馬が良かったのだけどね」と語られはしたものの，不要となった木曽馬は開田における伝統的な生活とともに姿を消していった。ここで得られた利用者らの語りは，生活のために木曽馬を飼育してきた人々が，同じく生活のために木曽馬を手放したことを，今の私たちの価値基準で批判できないことを教示していた。

2. M さんからの聞き取り

デイサービスでの聞き取りからでは得られない語りを聞くために，最近まで伝統的な様式で馬を飼育していたMさんから馬を飼うことに関する話を聞き取った。2008年に筆者らが木曽馬の保存に関わる研究を始めたころ，伝統的な飼育方法で木曽馬を飼育していた方々は少なからず残っていた。しかし，その後，10年でほとんどの飼育者は馬を手放していった。Mさんは，伝統的な方法で木曽馬を飼育していた最後の飼育者の1人であった。

まずMさんにご自身のことを聞き取った。Mさんは，「もう馬をやめてしまったので，じいはボケボケだ。それでも良いのか？」と話し始めた。つづいて，「この近くでも，馬を飼っていた家も多かった。それでも，ウチが最後，小学生も乗せていた。よく来てくれたよ。」と話された。Mさんが話を始めると，奥様が「もうボケボケで，どうしようもない話ばかりでごめんなさいね。」と加わった。これに続き，Mさんは「…ばあさんが，乗せたらいかんと，落ちてけがをさせたらいかん。そういう世の中になったから。それでも，馬は蹴ったり，振り落としたりはしない。蹴る馬，噛みつく馬は，印をつけて残さなかった。長いうちに淘汰してきた。生まれてから蹴られたことはない。子馬のころに教育してきたのだ。馬は大丈夫だ。」と馬への信頼を話された。また，「子供のころ，山の上に60町歩の放牧地があった。今は砂防ダムができて，なくなってしまったけれども，国有地で柵もなかった。朝，馬を放牧地へ連れて行って，夕方連れてくる。沢庵漬けを持っていくと，寄ってくるものもあった。これが子供の仕事で，放牧前に面綱をはずさないかん。だけど，仲間の馬が嘶くと飛んで行ってしまう。裸馬に乗っているので落とされる。ちょっとすると馬が戻ってきて，こちらの様子を見に来る。大丈夫か？って。」と馬との逸話を教えてくれた。

Mさんから，戦後，木曽馬が減少し始めたころの話を伺った。Mさんは，「ほとんどが中半血馬だった。木曽馬ばかりではなかった。それでも，昭和30年くらいだったか，伊藤正起先生が，木曽馬が少なくなっておるって。木曽馬を飼えって。一時，儲かるっていって，皆，馬から牛に替えていった。ただ，性格に合うというか，馬が良かったね。」と話された。これに対して，奥様は「いやだ。本当に昔の話ばっかり。」と間を入れた。奥様は，続けて「この人，1週間，平日は山から下りて来ないでしょ。私が1人で。」と，馬を飼うことが家族にとっても負担であったことを語られた。

馬を飼うことは容易ではない。M さんは「最近は，80 歳を過ぎたじいが馬を飼っていたら自分がダメになる。はやく馬を辞めんか！ と言われていた。朝も馬に餌をあげてから人が食べる。そのためには前の日には草を用意せんといかん。5 時か 6 時には草を刈って。冬には干し草を作って。」と馬を手放したころのことを話された。

さらに，馬がいなくなった後のことを M さんは，「さみしくはなった。出かけに，帰りに，声をかけていたもんがいなくなった。子らは一仕事なくなったというけど…」と語られた。その姿をみて奥様は「馬を飼うことがなくなって，この人ボケボケ。」と続けられた。

馬を飼うことは，経済的な見返りは少なく，肉体的な負担ならびに物理的な制約が大きい。合理的に考えれば，続ける理由が見当たらない。しかし，M さんにとって馬を飼うことが生きることであり，馬飼いであることが M さんのアイデンティティであったように感じられた。また，M さんは失われつつある地域において伝統的な生活を営むことで，旧家を継ぐ者の矜持を保っていたと考えられた。

結論

本研究では，戦後，伝統的な木曽の生活を送ってこられたデイサービスの利用者および M さんからの聞き取りから，かつて馬と過ごした木曽の人々の馬に対する思いの一端を明らかにできた。木曽においては馬を飼うことが生活であり，馬が生活の一部であった。木曽馬は，木曽の人々とともに長い年月を過ごし，「木曽馬」となったと言えると考えられた。しかし，この木曽馬の文脈は，戦後，社会の変遷とともに大きく変化した。木曽馬は不要な家畜となり，その数は減少した。今後，木曽馬を保存していくためには，かつての木曽馬の文脈を踏まえつつも，時代に沿った新たな木曽馬の文脈を探っていく必要がある。本研究では，時代に沿った新たな木曽馬の文脈を探っていくための基礎となる，かつての木曽馬の文脈の一端が明らかにできた。

引用文献

1) 伊藤正起．1996．木曽馬とともに．開田村，長野．
2) 黒田三郎．1977．信州木曽馬ものがたり．信濃路，長野．
3) ずんね空間．http://www.zoone.com/uma/kisouma.html. ずーね工房，長野．（閲覧日　2016 年 10 月 29 日）
4) 宮内泰介．2013．なぜ環境保全はうまくいかないのか：現場から考える「順応的ガバナンス」の可能性，新泉社，東京．
5) Takasu, M., et al., 2011. Population statistics and biological traits of endangered Kiso horse. J. Equine Sci. 22: 67–72.
6) Takasu, M., et al. 2012. Genetic characterization of endangered Kiso horse using 31 microsatellite DNAs. J. Vet. Med. Sci. 74: 161–166.
7) Takasu, M., et al. 2013. Hematological and biochemical reference values for the endangered Kiso horse J. Equine Sci. 24: 75–78, 2013.
8) Takasu, M., et al. 2014. Genetic diversity of maternal lineage in the endangered Kiso horse based on polymorphism of the mitochondrial DNA D-loop region. J. Vet. Med. Sci. 76: 1451–1456.

馬事資料

ヨーロッパにおける重種馬

Virginia KOUYOUMDJIAN

Virginia KOUYOUMDJIAN（ヴァージニア・クユミジャン）重種馬，特にペルシュロンの利用を促進するための国際的活動に携わってきている。英国人だが，現在はペルシュロンの原産地，仏国ペルシュ地方在住。仏，英，米のペルシュロン協会の会員で，カナダ，オーストラリア，南アフリカ，独，伊のブリーダーとも親しく交流を持っている。2011 年に仏国で開催された世界ペルシュロン大会の組織委員の 1 人で，2018 年にアイオワ（米国）で開催された同大会にも関わった。大学で日本語を学び，20 年以上日本に在留していた。日本と仏国や他の国々の重種馬のユーザーとの間の連携を強めることに尽力している。また米国で刊行されている重種馬に関する専門誌『The Draft Horse Journal』のレギュラー執筆者でもある。自身，2 頭のペルシュロンを所有している。

はじめに

ヨーロッパにおける重種馬をとりまく環境は，過去 1 世紀の間に大きく変わった。かつて，ほとんどすべての動力源であり，また輸送を担っていた馬は，より早い，より便利な機械の導入の結果，徐々に仕事を失っていった。何年もの間に重種馬の需要は減少し，ヨーロッパでは一部の熱心な馬愛好家たちの献身によってのみ生きながらえてきた。しかし，今，彼らが失ったいくつかの役割は復活しつつある。

ヨーロッパには多くの品種の重種馬がいるが，フランスが最もバラエティに富んでいることは疑う余地はない。フランスには公認されている重種馬 9 品種が存在し，それぞれにスタッドブックが発行されている（写真 1）。飼養頭数の多い品種も，とても少ない品種もいる。すなわち，コントワ（Comtois），ブルトン（Breton），ペルシュロン（Percheron），アルデンネ（Ardennais），コブ・ノルマン（Cob Normand），ブーロンネ（Boulonnais），オークスワ（Auxois），トレ・ドゥ・ノール（Trait du Nord），ムラシイェ・ポワティバン（Mulassier Poitevin）である。年間の生産頭数が 3000 頭を超えるブルトンから，50 頭にも満たないムラシイェ・ポワティバンまで存在する。イギリスには在来の 3 品種の輓用馬，すなわちシャイアー（Shire），クライズデール（Clydesdale），サフォークパンチ（Suffolk Punch：写真 2）が飼養されているが，それに加えてブリティッシュ・ペルシュロン（British Percheron）も存在する。ベルギーにはブラバント（Brabant）もしくはブラバンソン（Brabançon）と呼ばれるベルジアン重輓馬（Belgian heavy draft）がいるが，この品種はアメリカン・ベルジアン（American Belgian Horse）の基礎となった。またベルジアン・アルデンネヌ（Belgian Ardennes）も飼養されている。イタリアには，チロ・

写真 1.　フランスで繋養されている重種馬 14 品種と原産地を示すポスター

写真 2.　サフォークパンチ。フランス，ノルマンディーでの船の牽引。

サンテ（Tiro Pesante）と呼ばれる馬がいる。オーストリアにはノリカー（Noriker）がおり，ドイツには，レニッシュ・ジャーマン冷血種（Rhenish German），とシュレスビッヒ・ホルシュタイン重種（Schleswig-Holstein Heavy）の 2 品種が飼養されている。またスイスにはフランシュ・モンターニュ（Franche-Montagne）が，デンマークにはユトランド（Jutland）が存在する。ヨーロッパにおける輓用馬の正確な頭数に関する統計はないが，Rupal Khadka（スウェーデン農科大学）による 2010 年度の世界馬品種統計（Global Horse Population with respect to Breeds and Risk Status）によると，輓用馬の飼養頭数は，全世界の馬の 22%を占めていると推測されている。FAOSTAT（FAO の統計データベース）によると，2012 年のヨーロッパの馬は 580 万頭だが，実際の数字はもっと多いことが示唆されており，700 万頭かそれ以上と推測される。単純計算により，ヨーロッパにいる輓用馬は 120 万から 150 万頭になると結論づけられる。

フランスは自国の馬の生産管理を最も積極的に行ってきた国といえる。長年にわたり，国立馬繁殖地（Haras Nationaux）がそれぞれの品種の最も良い種牡馬を購入し，トップ種牡馬を低コストで繁殖農家の牝馬の種付けに供していた。このシステムは 2010 年に廃止されてしまったが，過去の最も困難な時期に，この取組みは輓用馬を生き残らせるうえで主たる役割を果たした。例えば，「馬のベルサイユ」として広く知られているノルマンディーの国立パン馬繁殖地種馬所（Haras du Pin）は，長年にわたり，ペルシュロンとコブ・ノルマン種の中心的な存在であった。

輓用馬―肉用家畜？

すべてのタイプの馬，なかでも輓用馬は食肉市場と密接な関わりを持っているが，同時に極めて物議を醸す話題を提供している。正当化する者は，ヨーロッパ，特にフランスにおいて輓用馬が生き延びてきたのは，食肉市場があったおかげであるとする。このことは生産馬のうち 80%以上が食肉用になるコントワやブルトンなどの品種においてはよくあてはまる。この説が事実だとして，それらの品種は肉用の需要のために生き延びてきたが，同時にネガティブな結果も招いている。輓用馬はもともと働くため，厳密には農耕用，客馬車，郵便馬車，駅馬車などを牽引するための品種であった。これらの用途にあった適切な馬を育種するため，体型に大きな配慮が払われてきた。市場の主力が食肉へと変化していく時，こうした配慮はほとんど払われなくなり，肉を最大限得られるような馬が重要視されるようになっていった。例えば，ペルシュロン種においては，より大型化はしたが同時に彼らが世界に名高かった繊細な気質，優雅さ，素晴らしい歩様は失われることとなった。しかし，この傾向は 1990 年代から徐々に弱まり，一方でフランスの馬肉消費は劇的に減少した。フランス食肉組合馬部門（Interbev Equine）によると，フランスにおける馬肉の消費は，21 世紀の最初の 10 年で 42%減少したとされている。フランスにおける年間の 1 人あたりの平均馬肉消費量は 400 g，これに対して牛肉は 25 kg，豚肉は 30 kg である。ただしヨーロッパの他の国，例えばイタリアにおいては，今も消費は一般的ではある。このような全体的な馬肉需要の下降傾向の中にあって，輓用馬がレジャーのすばらしいパートナーであると理解した人々によって，輓用馬の世界に新たな風が吹き始めている。かつての利用法をいくつか復活させるとともに，新たな活用法を発展させることで，輓用馬は過去の四半世紀を乗り超えて戻りつつある。

体型の問題

かつて農業や運搬で使われていたが，一時的に食肉用への改良が進んでしまった輓用馬を，今レジャーやスポーツをともにするコンパニオンにするためには，

まず体型自体を綿密に検討する必要があった。失われていた使役に向いた体形を取り戻すことが重要だった。ペルシュロン種に関しては，解決策は海の向こうにあった。19 世紀半ばから第一次世界大戦までの間，数万頭のペルシュロンがアメリカに輸出されていた。アメリカ人は馬肉を食べず，一方でアーミッシュの社会は今にいたるまで馬を労役に使用し続けており，人気のあった巡回ショー興業では 6 頭立てや 8 頭立ての輓用馬による馬車牽引が盛んに行われている。これら全ては，きわめて多様な育種環境ともいえ，馬たちはこの間，体重ではなく形質を対象に繁殖が続けられてきたのである。

1990 年代の初め，フランス・ペルシュロン協会（Société Hippique Percheronne de France）はアメリカ合衆国に，若い種牡馬を見いだすための代表団を送った。1993 年，彼らは Silver Shadows Sheik という，1 頭の 4 歳の種牡馬を輸入した。通称シルバーと呼ばれる同馬は，パン種馬所（Haras du Pin）の種牡馬として繋養され，10 年以上にわたって種付けが行われ，297 頭の子馬が登録された。品種の外見を変え，優雅さを回復し，かつて名高かった歩様を取り戻した。その後，フランスは Storey Creek Knight Cruiser，Hannah Hill Kemo Sabe，B&L Hanson's Ruby's Charlie をアメリカから，Czar of Livingstone Valley と Donnamer's Titan をカナダから相次いで輸入した。これらすべての種牡馬達は自らの足跡を残している。Czar of Livingstone Valley の 135 頭の子馬達は，乗用だけでなく馬車競技やレジャーによく適した体型のために特に高く評価された。同時並行的にイギリスもカナダから数頭の種牡馬を導入した。ただし Ryan Day Granitdier，Ryan Day Stewart，KDS Torin を含む全ての種牡馬は個人のブリーダーによって輸入された。

ヨーロッパの他のいくつかの品種については，逆輸入が積極的に行われず結果的に苦難をこうむることになった。例えば，イギリスのサフォークパンチは，サフォークパンチ協会が海外からの純血種の受け入れを頑なに拒否したため，遺伝資源プールは長い間にだんだんに縮小してきたといえよう。

輓用馬―世界への進出

輸出市場でかなり活発に取引された品種は，通常総合的に見ても最もよい品種のいくつかであるということは興味深い。フランスにおいて，ペルシュロン種は特に広範に輸出され，5 大陸全てに送り込まれる唯一の重種馬の品種である（写真 3）。イギリスにおいては，スコティッシュ・クライスデール種が北アメリカへの輸出が盛んで，そこで象徴的な輓用馬となり，バドワイザービールのプロモーションに貢献している。シャイアー種もまたヨーロッパ域内に広く輸出され，特にオランダで人気がある。さらに近年，ブーロンネ種がアメリカに輸出されているが，これはこの危険にさらされたフランスの品種に多様性をもたらす可能性がある。ベルギーもまた 19 世紀後半から 20 世紀前半，ブラバンソン重種馬を北アメリカに輸出し，のちにアメリカの「ベルジアン種」として地域的に発展することになった。

写真 3.　15世紀の古城を背に居並ぶペルシュロン。フランス，ペルシュ地方。

歴史的に，日本はフランスの輓用馬，特にペルシュロン種とブルトン種の興味深い輸出市場といえる。日本は 19 世紀後半からこれらの品種を輸入し始め，特に北海道の開拓のために用いた。また東北地方でも同様だった。この馬たちは小格の日本在来馬とは対照的だった。当初はきつい使役に用いられていたが，やが

て日本独自のスポーツである「ばんえい競走」―現代の日本に残された輓用馬のただ1つの重要な活躍の場―に使われるようになった。長年にわたって，十勝にある国立の種畜牧場はペルシュロン種とブルトン種の種牡馬と繁殖牝馬を定期的に輸入してきているが，直近の輸入年度は2018年および2019である。数年前，日本はまた主にコントワ種とブルトン種を，食肉生産のために生体で輸入しはじめた。このことは，馬の価格を上昇させ，多くの生産農家に馬生産を奨励することとなった。反対に，ヨーロッパ全体として，馬肉を食べることに否定的な人が増えてゆき，馬肉消費は急速に落ち込んできている。これは，馬がよりレジャーやスポーツのパートナーとなりつつあることの反動であり，家畜というよりペットとして見られている所以といえる。

ヨーロッパにおける輓用馬の復活

ヨーロッパにおいて，輓用馬がどのようにして復活を成し遂げたかを見てみるのは興味深い。多数の要因が関係しており，復活のプロセスはまだ進行中である。1つ忘れてはならないのは，ヨーロッパには他のどの大陸よりも多くの馬の品種がいるということである。これらの多くの品種は種々の用途のために作出されてきたが，輓用馬もその1つといえる。また，人々が輓用馬の見方を変えようと最大限の努力をしている。例えば，古い見方からすれば，輓用馬は乗用やレジャー用の馬車には適さないと考えられがちだが，現在ではこの見方が徐々に変わってきている。

近年ヨーロッパにおいて，輓用馬は農業全般や野菜果物農園，特にワイン畑や木材の馬搬（馬ならば土地の損傷を最小限にできる），馬乳生産，リサイクル廃棄物の回収，緑地の維持管理や学童の送迎のような業務に関して自治体で働くこと，馬車やガイドツアーのようなツーリズム産業，乗馬やホーストレッキング，伝統的馬車競技，スポーツ馬車競技（写真4）など非常に幅広く利用されている。

写真4.　馬車による障害競技。品種はペルシュロン。

農業における輓用馬

もちろんすべての農業分野において，輓用馬は長い間慣習的に利用されてきた。しかし，この目的のための馬の利用は，ヨーロッパではほぼ完全に消滅した。事実，馬の力による農業は，農家がより環境に配慮した農業を実践したいという理由で，トラクターよりも馬を用いることを意識的に選択している場合のみ見られる。1つの例として，イギリスのハンプシャー州のハーブリッジ農場のロバート・サンプソン氏があげられる。彼の農場は100ヘクタール以上あり，必要とされる動力はもっぱら馬に担わせ，1頭から時には一度に12頭までの馬を同時に使って作業をしている（写真5）。彼が主に使用しているプラウ（鋤）は，人が上に乗って使用するサルキー・プラウというものである。ハローや収穫などのような他の農作業では，トラクターのアタッチメントを交換するように，必要な部品を後ろに付けるだけである。彼は，週末と大変忙しい時期に3人の息子と農場の馬を世話する何人かの人間 の助けを借りるだけである。ただし，例外的な存在ではある。彼は専業農家ではなく，主な収入は輓用馬の繁殖，販売，トレーニングから得ている。おそらく，多くの人々が，より小規模な野菜や果樹園芸農家を馬を使って営んでいると思われる。その理由は，高価なトラクターを購入するよりも，1頭か2頭の馬を購入して使うほうが，経済的だというものある。実際上，農業分野において，馬の需要が急速に高まっているのは，唯一ワイン畑である。

写真5. 8頭立てでのハロー掛け。英国ハンプシャー。品種はペルシュロン。

ワイン畑における輓用馬

ワイン畑においてトラクターを使用することは，たいていの場合あまり良いことではない。ブドウのつるは非常に傷つきやすく，畝をぎりぎり通って動ける必要最小限の幅ではあるが，実際は大型の装置によってダメージを受けることがある。いかに正確に機械を操作できるかが大きな作業の制約となっている。またさらに重要なことは，トラクターは移動により畑の土を締め固めてしまい，ブドウのつるの生育に悪影響を及ぼす点である。機械化のために馬を手放すことを決めた地域の典型的なミスの例といえる。5ヘクタールかそれより小さい傾斜地のワイン畑で作られた高級ワインに付加価値が付くのは言うまでもなく事実である。現段階で，ワイン畑に馬を戻そうとする動きは主にフランスで起こっている。フランスでは，現在，ワイン畑での馬の利用について，馬と人双方をトレーニングする組織がいくつかあり，ワイン畑での馬の作業用の特別な道具を開発している人が何人もいる。

当初は少数のボルドーとブルゴーニュの最高級のワイン畑で，環境を意識した小規模ワイン農家により馬が利用されるようになった。より大規模なワイン農家は，馬を貸し出し作業終了後に馬を引き上げるというサービスを行っている業者を利用した。しかし，馬を用いることで，良好な成果が大いに得られたことから，より多くのワイン農家が馬を利用するようになり，彼ら自身が馬作業チームを有する傾向も多く認められるようになってきた（写真6）。

要約すると，1年を通してのワイン畑での馬による仕事は，主にブドウのつるを傷つけないようにしながら，土造りをすることにある。秋の終わりから冬にかけて，土はつるの根を保護するため根の上に耕起され，春になると，つるに通気するため逆のプロセスが行われる。成長の最盛期には，仕事の多くは雑草を取るために定期的に耕すことに集中する。これにより除草剤使用の必要性が回避される。馬で行われる作業は，トラクターでのどの作業よりも，より丁寧に行われる。近年フランスにおいて，輓用馬をワイン畑で使用することは，ボルドーやブルゴーニュ，シャンパーニュなどの世界的に有名なワイン畑から，国中の小さな農家へ広がってきている。

大事なことを書き忘れていたが，それはさまざまなレベルの「環境上の側面」が存在するということであ

写真 6.　ワイン畑での農作業。品種はコントワ。

る。第一として，農薬の量を減らすことは非常に重要なことといえる。一方で馬の力を利用するというイメージは，一般大衆へ訴える力がある。人々はますます環境を意識するようになっており，ワイン畑での馬の復活は拡大，成長し続けている。

木材の伐採や土地整備における輓用馬

ヨーロッパでは，20 世紀の後半には，馬を馬搬など林業で用いることはなくなった。しかし，環境の問題が前面に押し出されるようになって，環境面でデリケートな地域や急斜面で近づくのが困難な場所などで，馬が復活するようになってきた。馬搬に用いる馬を選ぶ場合，気性が最も重要である。

馬搬はヨーロッパ北部で最も広がっており，特にドイツで盛んである（写真 7）。ドイツ人のバイヤーが，馬搬のためにフランスにやって来るようになって久しい。彼らは，ペルシュロン種に加え，非常に力が強く

写真 7.　森林での馬搬作業。女性の樵が 2 頭の重種馬を使って木材を運搬している。フランス，ペルシュ地方。品種はペルシュロンとコントワ。

穏やかな性格で，トレーニングも容易なベルジアン種をしばしば利用している。

馬搬は，高いコストと森林の土壌への悪影響の防止というバランスの狭間にある。例えば，フランスの馬搬業者は，需要が大きく変動するので，営業を維持するのは困難といえる。短期間，国立森林事務所が馬を使用したが，長くは続かなかった。現在，馬搬の仕事の依頼の多くは，主に地方自治体あるいは民間から寄せられている。私の知るほとんどの馬搬業者は，馬に関することであるかないかに関わらず，他の仕事をして生計を立てている。

最後に，馬を用いて河床の清掃や，生け垣の刈り込みなど，馬搬（林業）から派生する様々な取組があることも付け加えておく。また，フランスでは小規模の林業では馬がますます使用されるようになってきており，環境への影響と騒音を最小限にできるので公園などの都市環境における清掃作業にも用いられてきている。

馬乳生産のための輓用馬

馬もしくはロバの乳を利用するという考え方はかなり昔までさかのぼる。伝説によれば，クレオパトラは肌に非常に良いということで，風呂にロバの乳を入れていたとされる。しかし，馬の乳生産は，ある問題のためにきわめて小規模にしか行われてこなかった。牛の場合，子牛を親から離すことができ，子牛がいなくても牛は乳を出し続ける。しかし，馬ではそうはいかない。子馬を離してしまうと，母馬はすぐに乳を出さなくなる。加えて，雌馬は完全にストレスのない環境で飼わなくてはならない。しかし，フランスにおいては，かなり大規模に馬の乳生産に成功している人々がいる。

ノルマンディーにある「シュバレ（Chevalait）」には，約 200 頭の繁殖雌馬が飼われている（写真 8）。子馬が産まれると，最初の 5 週間は子馬にだけ母乳を飲ませ，その後，子馬のために十分な乳を残しつつ 1 日 3 回雌馬の搾乳をする。牛から 1 日 30 リットルも牛乳が得

写真 8.　馬乳農場シュバレ。品種はペルシュロンとトレ・ドゥ・ノール。

られるのに対し，子馬と一緒の雌馬からは１日に 7～8 リットルしか得られない。このため馬乳は高価になるが，牛乳に比べて大きな利点も有している。

馬乳は最も人の母乳に近く，牛乳に対して好ましくない反応を示す乳幼児でも，馬乳なら問題が生じないということがある。これは，乾癬や湿疹のような肌に問題がある人たちにとっても，非常に良いことといえよう。

馬乳生産は，将来的には輓用馬にとって，もう１つの重要な「仕事」になるかもしれない。不当な利用だとする人がいるが，既に述べたように，雌馬から搾取することはできない。泌乳するためには，雌馬はハッピーでストレスのない環境で飼う必要があり，そのため馬乳生産農場の環境はいつも馬にとって最高といえるのである。

自治体における輓用馬の活用

フランスでは，村規模から人口 20 万人を超えるレンヌや，30 万人にもなるナントのような大都市まで，200 もの自治体が馬を用いている。この状況は，ベルギーなど，いくつかの国も同様である。

自治体で馬を用いることの主な問題は，その決定がしばしば政治的判断でなされ，選挙により，よく練られたプロジェクトがたちまち政治的理由のもとにひっくり返されることにある。生きている馬を飼い管理することが，ワゴン車やトラクターを利用することに比較され，障壁となる。

自治体において輓用馬はおおまかに 2 通りの使い方がなされている。すなわちリサイクル資材やゴミ（公共のゴミ箱）の収集（写真 9）と，街中の緑地の管理である。一部の自治体では，小学生くらいの年齢の子供たちの送迎（学生食堂や学校）にも利用されている。

車の代わりに馬を使うことで，仕事の効率をあげる

写真 9.　馬車を使ってのゴミの収集。品種はペルシュロン。

ことも観察されている。例えば，市内のゴミ箱の収集に場合は，馬の方がトラックより速くて操作も簡単といえる。リサイクル資源の回収では，馬でやった方が，人々が外に出てきて，動物を見て，お互いにおしゃべりするために，回収できる資源が相当多くなる。馬の利用がコミュニティーにとってよい社会的影響を及ぼす事象といえよう。

ツーリズムやエンターテインメントにおける輓用馬

ヨーロッパのいくつかの中型都市では観光客向けに馬車利用のオプションを提供しているが，通常は夏季に実施される。パリにも，街中を巡覧するための馬車という高級サービスがある。しかし，これらのサービスを提供する業者の多くは，馬車観光はパートタイムの仕事であって，他の何か別の仕事もしている。また，馬自体や馬たちの幸福のあり方についてあまり良く分かっていない動物保護活動家の問題も増えてきており，都市環境下で馬を利用することに反対するキャンペーンの声がますます大きくなってきている。言うまでもなく，もし活動家が馬の利用をやめさせるという目標を達成したら，将来を保証する潜在的な仕事が１つ馬から奪われることで，さらに深い一撃を加えられてしまうことになるだろう。

純粋なエンターテインメントの世界は馬に適した活躍場所としては限られているが，輓用馬の調教のしやすさや優れた気質は，馬場馬術，儀式，ボルティング（軽乗）などで人々におおいにアピールできる。

スポーツやレジャーにおける輓用馬

輓用馬は従来使役用の家畜としてとらえられてきたが，近年ではレジャーのために利用されることが増えてきている。結局のところ，輓用馬の最も優れたアピール点の１つは彼らの多才さにある。１頭の馬が，乗馬用，馬車用，木の切り出し，田畑の耕作に手軽に利用できる。ますます多くの輓用馬が馬車競技で見られるようになり，素晴らしいパフォーマンスを披露している。また多くの乗馬愛好家が輓用馬で馬場馬術の競技会に出場している。

スポーツ，レジャー，馬と並べると，ほとんどの人は乗馬と馬車を考える。しかし今日ヨーロッパ，特にイギリスで盛んに行われている重種馬によるスポーツ

写真 10.　重種馬での野外騎乗。品種はペルシュロン。

は馬耕である（写真 10）。ある意味で馬の利用が一周してもとに戻ったといえよう。馬耕大会は秋に始まり，地面が凍らなければ冬の期間も国中で行われてる。目指すゴールは最もまっすぐで最も均一な溝を掘ることにある。馬にゆっくり落ち着いて動くことを教えるよい方法ととらえることもできる。

輓用馬の未来

現在，ヨーロッパにおいて輓用馬を幅広く活用しようとする際の大きな障害の１つは，ある種の認識の問題である。多くの人にとっては，馬は過ぎ去った時代の代表者で現代社会からは外れた存在である。一方で，ますます多くの人が，環境問題やその破壊の観点から化石燃料に代わるエネルギーの伸長を模索している。輓用馬には人々と共に働いてきた長い歴史があり，彼らの気質は余暇活動にとっても完璧なコンパニオンになりうるといえる。随分難しい時期を経てきたが，これからもう一度輓用馬が人々とともに未来に向かって歩き続けていることを今願っている。

（翻訳：荒川由紀子・楠瀬　良）

馬事資料

軽種馬生産の推移と展望
―平成から令和へ―

小林　廉，辻　耕治*
千葉大学教育学部（*tsujikoji684@chiba-u.jp）

小林　廉（こばやし　れん）
平成 31 年千葉大学教育学部卒業。強い軽種馬育成に寄与する環境要因の解明に関心を持ち，卒業研究では複数の生産牧場・育成牧場を訪問して聞き取り調査を行った。現在は千葉県の公立小学校教員。

要約

競馬界の衰勢や傾向は，時々の社会事象の影響を受けつつ変遷してきた。本報では，競馬界，特に軽種馬生産に関して，その変遷を主に平成に焦点をあてて概説するとともに，現在の課題を明示し，今後の展望を述べる。平成の経済は，初期のバブル景気，その後の低迷期を経て，後期から現在まで回復傾向にある。競馬の人気・売得金も景気と連動する傾向で推移してきた。景気に加えて，平成後期の売得金の増加傾向の要因には，日常への IT の浸透，それに伴う在宅投票システム（IPAT）の導入も挙げられる。軽種馬生産に関しては，「大規模牧場と小規模牧場の 2 極化」と「都府県馬産地の衰退による北海道への生産地集積化」の流れが進行中である。「大規模牧場と小規模牧場の 2 極化」の要因には，バブル経済終焉意向の不景気の中で経済的基盤の弱い生産牧場は廃業を余儀なくされたこと，競馬界の国際化の中で生き残るためには大規模化による体力強化の必要性が高まったこと等が挙げられる。「都府県馬産地の衰退による北海道への生産地集積化」の要因には，北海道以外の地域は都市化の進行により軽種馬生産地としての土地条件が厳しくなったこと，優秀な種雄は北海道に多いこと等が挙げられる。今後も「大規模牧場と小規模牧場の 2 極化」と「都府県馬産地の衰退による北海道への生産地集積化」の流れは継続すると予想するが，軽種馬の遺伝的多様性の保全や地域振興等の観点から，小規模牧場や北海道以外の地域の牧場の重要性も認識すべきと考える。

キーワード：軽種馬生産，生産牧場，大規模化，北海道，平成

1. はじめに

平成の終幕が近くなるにつれ，平成の 30 年間を振り返るテレビ番組や書籍を日常的に見かけた。平成の 30 年間は，景気の大幅な変動や大災害を経験するとともに日常に IT の浸透が進んだ時代であった。競馬界もこれらの社会事象の影響を受けつつ，令和の現在に至る。そこで本報では，競馬界，特に軽種馬生産に関して，その変遷を主に平成に焦点をあてて概説するとともに，現在の課題を明示し，今後の展望を述べたいと考えた。本報では，これらを論じるためのデータとして，関連する文献・統計資料等に加えて，軽種馬生産牧場の関係者へ筆者自身が行った聞き取り調査の結果を用いた。聞き取り調査は，「優駿のふるさと」と呼ばれる北海道日高地方に所在する 3 つの軽種馬生産牧場，すなわち日高育成牧場，有限会社谷川牧場および日本軽種馬協会静内軽種馬場を対象に 2017 年 11 月 19 日～ 21 日に行った。

2. 入場人員・売得金の推移

日本中央競馬協会は，1985 年（昭和 60 年）にサービス推進部を新設する等，昭和終盤からファンサービスの向上に積極的に取り組むようになった[1)]。その成果として，競馬場への入場人員は増加に転じ[1)]（図 1），売得金も躍進した[1)]（図 2）。バブル景気の世相も影響して，平成初期には競馬のマスコミへの登場頻度は格段に増加し，女性や若者のファンを増やし，空前の競馬ブームが到来した[1,2)]。

しかし，バブル景気の終焉に伴い，売得金は地方競馬では 1992 年（平成 4 年）に前年対比でマイナスに転じた[1)]（図 2）。中央競馬では 1991 年（平成 3 年）に馬連が導入された効果もあり[2)]，バブル景気終焉後もしばらくは売得金は増加傾向を維持したものの，1998 年

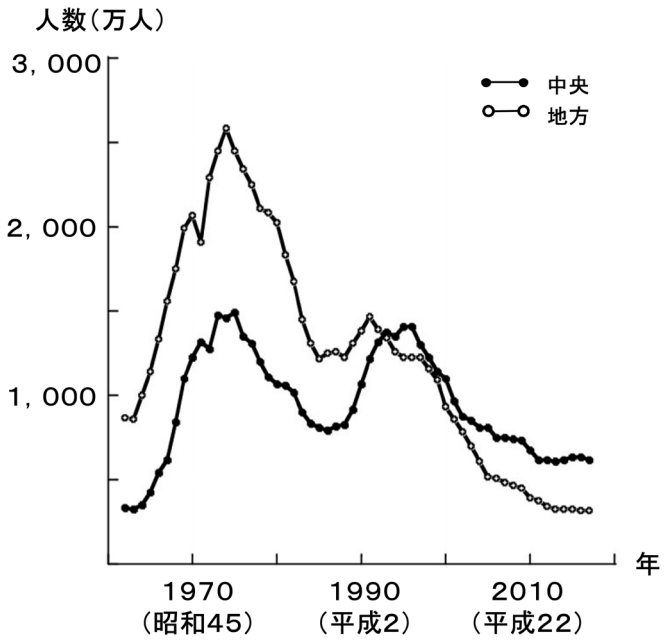


図1.　入場人員の推移（「日本近代競馬総合年表」[1] より作成）

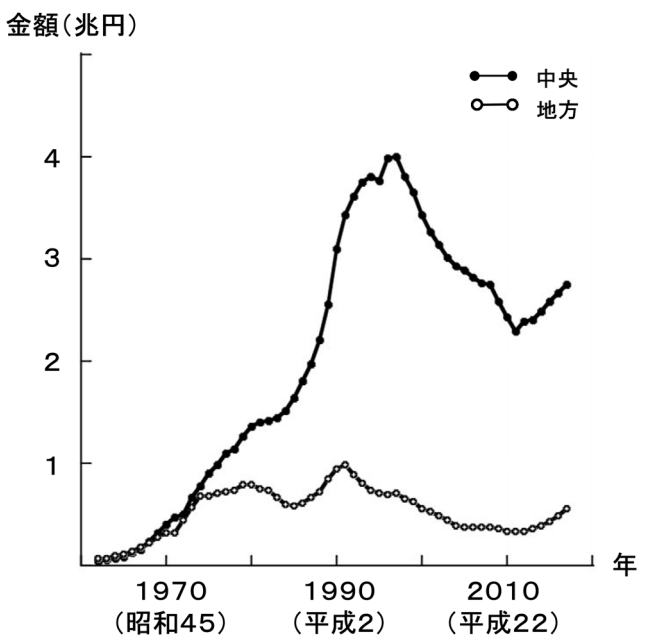


図2.　売得金の推移（「日本近代競馬総合年表」[1] より作成）

（平成 10 年）からはマイナスに転じた[1]（図 2）。

バブル景気が終焉した 1992 年（平成 4 年）から東日本大震災に見舞われた 2011 年（平成 23 年）頃まで低調であった日本の景気は，2012 年（平成 24 年）頃から復調しつつある[3]。景気回復に連動して，1998 年（平成 10 年）から 2011 年（平成 23 年）まで減少傾向にあった中央競馬の売得金は，2012 年（平成 23 年）から増加に転じている[1]（図 2）。1992 年（平成 4 年）から減少傾向にあった地方競馬の売得金も同様に，2012 年（平成 24 年）以降は復調している[1]（図 2）。地方競馬の復調は，2001 年（平成 13 年）から 2005 年（平成 17 年）には 7 つの施行者が事業から撤退した一方で，2012 年（平成 24 年）以降は広島の福山競馬場のみの廃止に留まっている[4] ことからもうかがえる。

2012 年（平成 24 年）以降の売得金復調の要因として，景気回復に加えて，日常への IT の浸透，それに伴う日本中央競馬協会の在宅投票システム（IPAT）の導入[1] が考えられる。逆に，競馬場の入場人員は地方競馬では減少傾向[1]（図 1），中央競馬でも減少する年もある[1]（図 1）原因も，IPAT の導入が影響していると考えられる。また，主要な競馬場や馬券売場への来場者の平均年齢は，1991 年（平成 3 年）には 42.7 歳であったが，2014 年（平成 26 年）には 55.8 歳に上昇している[5]。このデータから，IPAT 導入は若年層の馬券購買を促進する効果があったと同時に，競馬場や馬券売場から若年層の足を遠ざける要因にもなっていることが読み取れる。

3. 軽種馬生産の動向

軽種馬の生産頭数は，1947 年（昭和 22 年）以降は増加傾向をたどり，バブル景気が終焉する 1992 年（平成 4 年）にピークに達した[6]（図 3）。その後は減少傾向をたどったが，景気が回復傾向となった 2013 年（平成 25 年）以降は再び増加に転じ，現在に至る[6]（図 3）。

一方で軽種馬の生産牧場数は，データを入手できた 2001 年（平成 13 年）から現在まで減少傾向をたどっている[6-23]（図 4）。

軽種馬の生産牧場数については，規模別と地域別の観点での推移にも着目したい。1999 年の時点で，従来多数を占めてきた小規模牧場が減少する一方で大規模牧場は増加する「大規模牧場と小規模牧場の 2 極化」と，都府県馬産地の衰退による「北海道への生産地集積化」が進行中であることが報告されている[2]。そこで，この「大規模牧場と小規模牧場の 2 極化」と「北海道への生産地集積化」の傾向は 2000 年代以降も継続しているのかについて，統計資料[6-23] に基づいて検証した。

まず，軽種馬の生産牧場数を規模別に見ると，2000

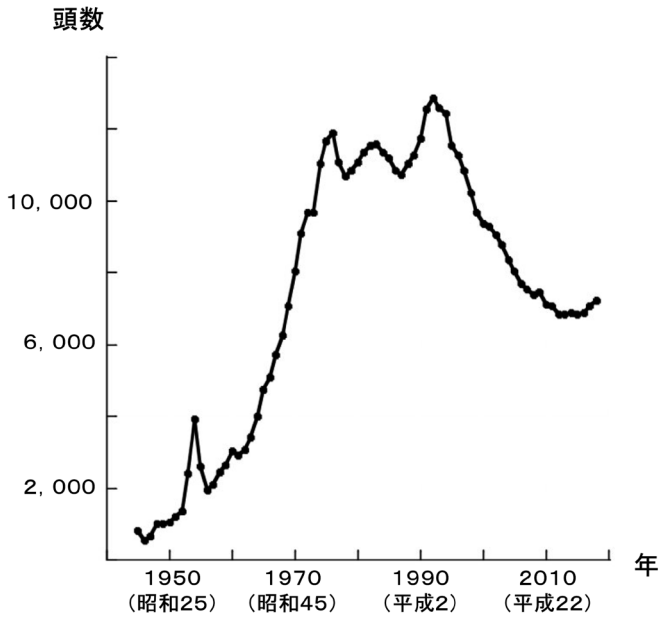


図 3.　軽種馬生産頭数の推移（「2018 軽種馬統計」[6] より作成）

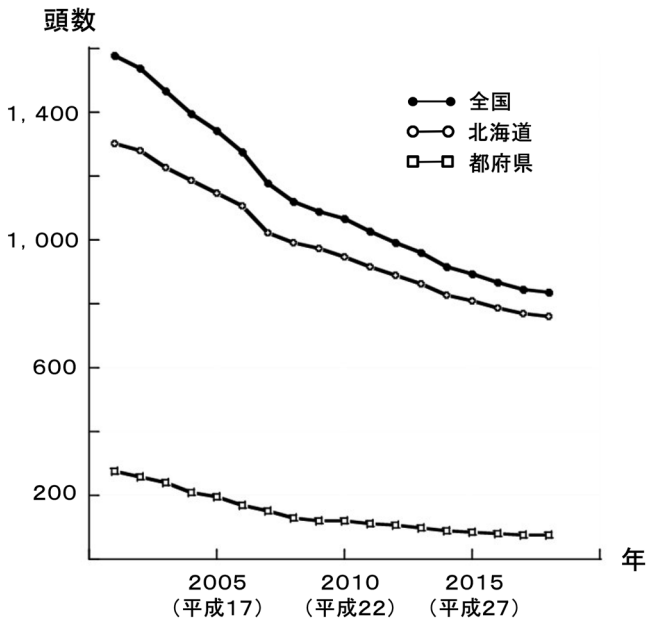


図 4.　種雌馬飼養牧場数の推移（「2001～2018 軽種馬統計」[6-23] より作成）

年代以降も 1～10 頭の小規模な牧場数は減少傾向，51 頭以上の大規模な牧場は増加傾向にあること，すなわち，従来多かった小規模牧場は減少する一方で大規模牧場は増加する「大規模牧場と小規模牧場の 2 極化」が進行中であることが読み取れた。具体的には，1～10 頭の小規模牧場と 51 頭以上の大規模牧場の戸数の比率を 2001 年と 2018 年で比較すると，2001 年は 137 だったが 2018 年には 22 と，急速に縮まっている[6,7]（表 1）。

次に，軽種馬の生産牧場数を地域別に見ると，2000 年代以降も北海道では増加傾向，その他の地域では減少傾向にあること[6-23]（図 4），すなわち，「北海道への生産地集積化」が進行中であることが読み取れた。

表 1.　種雌馬飼養牧場数（規模別）の推移

	1 ～ 10 頭（小規模）		51 頭以上（大規模）		小規模／大規模の比率
	戸数	2001 年からの増減率	戸数	2001 年からの増減率	
2001	1,236		9		137
2018	559	0.45	25	2.78	22

4.　軽馬生産牧場の規模の 2 極化の要因

「大規模牧場と小規模牧場の 2 極化」の要因として，3 点挙げられる。

1 点目は，軽種馬生産者の多くは高度経済成長期以降に農業から転換した元農民であり，経営・資金基盤が脆弱な家族経営であったことである[2]。そのため，多くの牧場はバブル崩壊後に規模縮小や，牧場自体の廃業など再編を余儀なくされた[2]。

2 点目は，バブル景気終焉後の 1992 年（平成 4 年）以降の競馬界は国際化期とも呼ばれており[2]，海外馬に追いつくために競走馬の質向上が求められた時代背景である。この時代を生き抜く手段として，軽種馬生産牧場は大規模化による体力強化を進めたと考えられる。それにより軽種馬の輸入と軽馬生産に関する技術の導入を進めることができ，大規模生産牧場の一例である社台ファームグループは，勝ち数や獲得賞金で日本一になるに至った[24]。このことに関して，聞き取り調査では，日高育成牧場関係者は「天候に左右されることのない屋内調教施設を導入したり，デビュー後外厩で日本有数の傾斜を持つ坂路で調教を行っていたり他牧場との質の差を広げている軽種馬の質向上の取り組みが行われるようになった」，谷川牧場関係者は「ある程度の規模があり，生産地の技術や設備の変化に対応できる牧場は，社台に近づけるように似た調教を行っている。キタサンブラックを輩出するなど，近年力をつけてきたヤナガワ牧場も，離乳した馬の育成を行う土地を非常に広くとっており，牧場を広げ，社台

ファームのやり方を踏襲している」と述べている。

3点目は，生産者の実態に拠るものである。聞き取り調査では，谷川牧場関係者は「軽種馬生産地では全体的に好景気を迎えており，セリの価格も上がってきていることから，夢を追うことができる生産者もいるが，実際には廃業が相次いでいる。また，1頭に割くことのできる人数は減少していて，人手が足りていない」と述べている。軽種馬生産牧場が共通に抱えているこの問題は，大規模牧場では従業員不足によるところが大きいため，近年では外国人を労働者として雇うことで対策はできている。一方で，小規模牧場では経営形態が家族経営主体であるため，高齢化の進行と後継ぎの不在に直面し，廃業につながるケースも少なくない。

5. 北海道への軽種馬生産地集約の要因

「北海道への生産地集積化」の要因として3点挙げられる。

1点目は，都府県生産の都市化の影響で，土地条件が厳しくなったことである[2,24]。

2点目は，聞き取り調査によると，「北海道以外の地域には質の高い種雄馬が存在していないこと（日本軽種馬協会）」である。一方で，「馬主は，質の良い生産を行う種雄馬を求めて，金銭面と繁殖雌馬の体調面で負担が大きいにもかかわらず北海道への長距離輸送を行うケースも多い。しかし，全ての牧場の種雌馬が外部に種を求めることはできない状況にあり，現実には北海道以外の地域にいる種雄馬との交配も行っている（日本軽種馬協会）」のが現状であるため，各地域に優良な種雄馬がいることが望ましいと言える。

3点目は，聞き取り調査によると，「生産・育成の技術や人の数に差がある（日本軽種馬協会）」ことである。その原因として，小規模牧場が多いことや後継者不足の問題が考えられる。

6. 今後の展望と提言

平成から現在まで，日本の軽種馬生産は「生産牧場の大規模と小規模の2極化」と「北海道への生産地集約」の流れの中にあり，今後も小規模生産牧場および北海道以外の地域の生産牧場は減少の一途をたどると予想される。しかし筆者は，小規模生産牧場や北海道以外の地域の生産牧場にも存在価値はあると考えている。その理由の1つは，馬の遺伝的な多様性を保全するために，これらの生産牧場は役割を果たしていると考えるためである。生産牧場の集約化が極度に進行すると，馬の遺伝的多様性が失われ，品種改良の選択肢が少なくなることが危惧される。理由の2つ目は，大規模牧場の種雄馬事業の買い手は小規模牧場であるため，小規模牧場の数が減少しすぎると大規模牧場の収入も減少すると予想されるためである。そこで，小規模牧場や北海道以外の地域の牧場が生き残っていくための発想・手段を提言したい。

まず，大規模牧場と比べて技術力・資金力の乏しい小規模牧場が生き残っていくには，限られた資金の中で質の高い馬を生産する取り組みが必要になる。例えば，種雌馬の厳選を行うことが有効と考える。

次に，北海道以外の地域の生産牧場が生き残るためには，北海道に頼らなくても質の高い軽種馬を生産できる馬産地の形を作りだすことが重要と考える。そのために有効なのは，種雄馬が集まるスタリオンステーションと呼ばれる牧場の質の向上であろう。近年，その端緒となる取り組みが行われている。2016年より青森の荒谷牧場に高い競争実績のある新軽種馬ウインバリアシオンが，北海道を経由することなく引退後すぐに導入され，2017年の初種付けでは，東北地方の殆どの繁殖雌馬に加え，北海道からも数頭を集める結果になり，都府県の生産地に集積地になりうる新たな可能性が見出されている[25]。これに続く取り組みが他の生産牧場でも展開されることを期待したい。

令和の時代も軽種馬生産の「牧場の大規模と小規模の2極化」と「北海道への生産地集約」の流れは続くと予想する。その中で，小規模生産牧場および北海道以外の地域の生産牧場も一定数は存続し，競馬界の発展に寄与することを期待したい。

謝辞　軽種馬についての聞き取り調査にご協力いただいた日高育成牧場，有限会社谷川牧場および日本軽種馬協会静内軽種馬場の方々に感謝申し上げます。

引用文献

1) 中央競馬ピーアール・センター．2018．日本近代競馬総合年表．中央競馬振興会，東京．
2) 中央畜産会．1999．新たな時代の軽種馬生産．日本中央競馬会，東京．

3) 内閣府．2018 年 8 月．平成 30 年度年次経済財政報告（経済財政政策担当大臣報告）―「白書」：今，Society 5.0 の経済へ―，東京.
4) 日本経済新聞．2017 年 8 月 12 日．5 年連続で業績回復地方競馬の真の復活条件，東京.
5) 中央競馬ピーアール・センター．2015．日本中央競馬会 60 年史，日本中央競馬会，東京.
6) ジャパン・スタッドブック・インターナショナル，日本軽種馬協会．2019．2018 軽種馬統計，東京.
7) ジャパン・スタッドブック・インターナショナル，日本軽種馬協会．2002．2001 軽種馬統計，東京.
8) ジャパン・スタッドブック・インターナショナル，日本軽種馬協会．2003．2002 軽種馬統計，東京.
9) ジャパン・スタッドブック・インターナショナル，日本軽種馬協会．2004．2003 軽種馬統計，東京.
10) ジャパン・スタッドブック・インターナショナル，日本軽種馬協会．2005．2004 軽種馬統計，東京.
11) ジャパン・スタッドブック・インターナショナル，日本軽種馬協会．2006．2005 軽種馬統計，東京.
12) ジャパン・スタッドブック・インターナショナル，日本軽種馬協会．2007．2006 軽種馬統計，東京.
13) ジャパン・スタッドブック・インターナショナル，日本軽種馬協会．2008．2007 軽種馬統計，東京.
14) ジャパン・スタッドブック・インターナショナル，日本軽種馬協会．2009．2008 軽種馬統計，東京.
15) ジャパン・スタッドブック・インターナショナル，日本軽種馬協会．2010．2009 軽種馬統計，東京.
16) ジャパン・スタッドブック・インターナショナル，日本軽種馬協会．2011．2010 軽種馬統計，東京.
17) ジャパン・スタッドブック・インターナショナル，日本軽種馬協会．2012．2011 軽種馬統計，東京.
18) ジャパン・スタッドブック・インターナショナル，日本軽種馬協会．2013．2012 軽種馬統計，東京.
19) ジャパン・スタッドブック・インターナショナル，日本軽種馬協会．2014．2013 軽種馬統計，東京.
20) ジャパン・スタッドブック・インターナショナル，日本軽種馬協会．2015．2014 軽種馬統計，東京.
21) ジャパン・スタッドブック・インターナショナル，日本軽種馬協会．2016．2015 軽種馬統計，東京.
22) ジャパン・スタッドブック・インターナショナル，日本軽種馬協会．2017．2016 軽種馬統計，東京.
23) ジャパン・スタッドブック・インターナショナル，日本軽種馬協会．2018．2017 軽種馬統計，東京.
24) 岩崎　徹．2005．馬産地 80 話―日高から見た日本競馬．北海道大学出版，札幌.
25) 日本軽種馬協会．2015．ウインバリアシオンのお披露目会が盛大に開かれました．JBBA NEWS．p. 38.

馬事往来

いとしの引退馬たち
―元気な余生を願って―

上坂由香

上坂 由香（うえさか　ゆか）
1968 年，札幌生まれ。2007 年，中央競馬のトウショウシロッコに魅せられ競馬を始める。競馬雑誌や JBIS サーチ『競馬女子部』などにコラムを連載。2010 年に引退したトウショウシロッコを引き取り，警視庁騎馬隊へ譲渡。引退馬支援のボランティア活動を続ける。2009 年の天皇賞（秋）観戦記『競馬場にはお洒落して』で第 6 回週刊 Gallop エッセイ大賞受賞。

「運命の馬」との出会い

2007 年，春の札幌。雨宿りのつもりで入った夕暮れ間近の場外馬券売り場ウインズ。ネオンがまだ灯らないススキノの一角に，たくさんの人が集まっていました。―そうか。今日は日曜日だった…と，遅まきながら気づき「いけ」「させ」「あ～～」などなど，思い思いの声援を送る観衆を，遠巻きに眺めていました。

時々オッズの画面に切り替わるテレビに，東京競馬場のスタンド改修記念で開催された「東京グランドオープン」の様子が映し出されています。

「トロフィーディール，トウショウシロッコ，トロフィーディール，トウショウシロッコ…」

臨場感あふれる中央競馬（JRA）実況中継の声に，何事かと身を乗り出して画面に見入ると，紫のメンコをつけた馬ともう一頭が，ゴール前で激しいデッドヒートを繰り広げていました。

競馬のイロハも知らず，馬の世界に門外漢の私は，ただただ手のひらを熱くこすり合せて，目に留まった紫メンコの応援に入りました。

―紫メンコよ，頑張れ！ 負けるな！…

「トロフィーディール，トウショウシロッコ…」「勝ったのはトウ～ショウ～シロッコ！」

何度行ってもパン屋の名前は忘れてしまうのに，なぜかこの「シロッコ」という名前だけは，すぅーっと身体に入り込んできたのです。ひょんなことで応援した馬が勝つという，競馬の素朴な面白さと感動を，馬券も買わずに味わえたお得感があったからなのでしょうか。

それからというもの，私はトウショウシロッコ（2003 年 4 月生まれのサラブレッド牡，45 戦 3 勝，獲得賞金 3 億 276 万円＝以下表記シロッコ）の動向が気になり，新聞や雑誌を買っては，本格的に競馬の勉強に勤しむ日々となりました。家族の目を盗んで（今は大威張りで見ていますが）さりげなく競馬番組にチャンネルを合わせてお茶を飲んだり，シロッコの情報集めに努めました。

あの頃の私は，競馬が好きというよりも，「たくさんいる競走馬の中で，なぜシロッコに魅せられたのか」その訳を突き止めたかったのかもしれません。

シロッコと交わした約束

ほどなく，シロッコは脚のケガのため，生まれ故郷のトウショウ牧場（新ひだか町，2015 年 9 月閉場）で休養していることを知り，「これは一大事」とお見舞いに出かけました。

馬房の中で退屈そうに小窓を眺めるシロッコを見た瞬間，母親気質が噴き出した私は，息子に言い聞かせるように，励ましの言葉を伝えていました。

「大丈夫。こんなケガはたいしたことはない。必ず治る。でもね，いつか本当に走れなくなったら，その時は私が迎えにくるから」

自分でもどうしてそんな約束をしてしまったのかわかりませんが，今思えば，「そんな予感がした」というよりも，勢いでいい放った言葉に，後から現実が追い駆けてきたような気がしています。

シロッコは何度か生欠伸をしながら聞いていましたが，あの日のことを覚えているかは，今もって不明です。

その後 1 年以上の長い休養を経て，天皇賞・秋などに出走。7 歳まで現役を続け，2010 年，福島記念 3 着を最後にシロッコは引退しました。私は前もってトウショウ牧場に引き取りの件を話していましたが，3 億円以上稼いだ競走馬が，認印ひとつであっけなく無償譲渡されるとは思わず，生まれて初めての武者震いを

経験しました。

ここで意外だったのは，私のほかにシロッコを譲ってほしいという申し出がなかったという話をトウショウ牧場から聞いた時です。何度も掲示板を飾った競走馬に，ひとつも声がかからないなんて…。

今思えば，馬を引き取るという大それたことを，家族に相談なしでやってのけた自分にも驚きですが，馬の神様から「ともかく，今はそうしなさい」と啓示を受けたような気がしています。

人生いろいろあるけれど，中年に差し掛かった時点で競馬に出会ったこともしかり，競走馬（特に牡馬）の引退後，生きることもままならない厳しい現実があることを突き付けられ，踏み入ってはいけない領域の向こう岸が見えた気がしました。

警視庁騎馬隊への道

競馬を始めた頃と同時期に「いつかシロッコに乗る日がくるかもしれない」と乗馬を習い始め，乗り方はもちろん，手入れの仕方など馬の扱い方を教わっていました。シロッコを譲り受けた後，通っている乗馬クラブに移動させる手筈を前もって整えていたつもりでしたが，突然の引退発表にタイミングが合わず，空いていたふたつの馬房は数日前に満室になっていました。ほかの牧場にも一時的に置いてもらえないかと頭を下げ，手を尽くしてみたものの，あと一歩で条件が合いません。

群馬県境のトレーニングセンターで繋養中のシロッコ。3ヵ月間，入隊まで待機していましたが，新井オーナーが毎週のように訪れて曳き運動をしてくれました（写真提供：新井康之氏）。

登録抹消した馬は，長くても1週間ほどでトレーニングセンターを出なくてはいけないこともあり，焦りの色を濃くした私は，新ひだか町の養老牧場ローリングエッグスクラブ（2018年牧場は閉場）の宮本直美さんに相談。またしても馬房は満室になったばかりという回答でした。ところが，宮本さんの口から，思いもよらない提案を持ちかけられたのです。

「警視庁騎馬隊で馬を探している。シロッコはどうだろうか」

ローリングエッグスクラブでは，その年の夏に騎馬隊を任期満了で引退したテンジンショウグン（1998年日経賞優勝）が余生を過ごしていました。私はその様子を取材して週刊ギャロップのコラムに寄稿，ご縁がつながっていたのです。

重賞レースで2着5回，3着6回といつも惜しいところで勝ちきれなかったシロッコに，引退を聞きつけた各方面から「相馬野馬追の馬にしたい」，血統の良さ（父はダービー馬のアドマイヤベガ，母父ニッポーテイオー）を見込まれ「種牡馬として迎えたい」，などの打診もありました。どのお話しもシロッコのためには素晴らしいものでしたが，現役の時には叶わなかった栄誉ある称号をあげたい気持ちと，すでに我が子同然のシロッコに，ハクを付けたくなった母心なのでしょう。宮本さんが勧めてくれた警視庁騎馬隊の入隊を目指すことにしました。

騎馬隊では，馬列の美しさを保つため，馬格の大きさは平均（大きくても小さくてもダメ），治療中のケガはないか，気質は安定しているかなど，警察官が実際に乗り味を確かめながら合否を判断します。

あれほど馬房探しに苦労したシロッコは，ここであっさりと騎馬隊の検査に合格。入隊する前の3ヵ月間は，南関東競馬所属の新井康之オーナーにお世話になり，群馬県の境トレセンに繋養しました。新井オーナーは，たびたびトレセンを訪れてはシロッコを可愛がり，曳き運動もしてくださいました。

ここで誤算だったのは，去勢の手術をしなければならないことでした。セカンドキャリアのためとはいえ，病気でも何でもない健康な馬体の一部を切除しなければならない去勢という行為は，息子のいる私にとって，それはもうとんでもないことでしかありません。すでに家族同様の愛馬が私の一存で，この先恋もできなくなってしまうのかと泣きはらしました。

東京都世田谷区にある馬事公苑で行われた警視庁騎馬隊のレプリーズ（中央がシロッコ）。騎馬隊のエースとして活躍しています。（写真提供：朝内大助氏）

騎馬隊への入隊時は，「馬と人のハッピーライフ」を目指して引退馬の支援を続ける認定 NPO 法人引退馬協会代表の沼田恭子さんに，難しい手続きや書類等を作成していただきました。

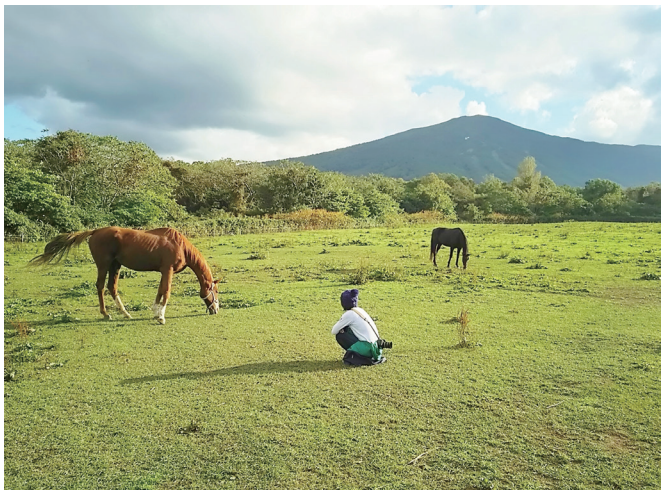
こうして，テンジンショウグンがつないでくれたご縁と，たくさんの方々のお力添えで騎馬隊の馬になることができたシロッコは，騎馬隊名を颯駿（そうしゅん）と改め，現在は交通安全のパレードや皇居の警備などに出動し任務を遂行しています。

シロッコもまた，テンジンショウグンのように任期（馬体に問題がなければ 20 歳ほど）を全うした後は，いよいよ私の手元に戻って来ます。近所の乗馬クラブに繋養して私が乗って交通パトロールに出かけるか（冗談です），高齢ということもあり，健康状態によってはそのまま余生牧場でのんびり過ごしてもらうかもしれません。年に一度，東京の騎馬隊を訪ね，シロッコに面会していますが，元気でいれば，あと 4 年ほどの任期。今は無事に帰って来てくれることを心待ちにしています。

騎馬隊名が「颯駿」と決まった入隊式での 1 コマ。警視庁のマスコット・ピーポくんに歩み寄ってホッとひと息のシロッコ（写真提供：明石智子氏）。

感動のホーストラスト北海道

小樽市からほど近い岩内町にある，功労馬余生牧場 NPO 法人ホーストラスト北海道。シロッコの馬房探しに奔走している頃，一時的でも預かってもらえないも



NPO 法人ホーストラスト北海道岩内本場の放牧地。スポンサーも放牧地に入って，愛馬とふれあいながら憩いのひとときを味わえます。

共和分場の仲良しさんたち

のんびりと仲良く草を食むアドマイヤチャンプ（右）とウインギガシャトル（左）。馬たちはそれぞれ友だちを作って，寄り添いながら暮らしています。*ウインギガシャトルは 2019 年 6 月に天寿を全うしました。

のかと相談した牧場です。場長の酒井政明さんは同町の出身で，ホッカイドウ競馬が行われている門別競馬場（日高町）の元厩務員。騎手を目指して門別入りしましたが，視力が規定条件を満たさなかったため，そのまま厩務員として働いた経歴の持ち主。門別時代，シルバースワットという 1 頭の馬を引き取り，故郷へ帰った酒井さんは，この地に余生牧場を設立しました。

「引退した馬たちが安心して暮らせるようにしてあげたかった」と語る酒井さんは，私が知る限り，群を抜いて馬をこよなく愛する心優しい人物。日々，馬たちの世話のほかにも，東日本大震災の時は，被災馬たちを救いたいと馬運車を運転して駆けつけたり，他の牧場や乗馬クラブから廃用を宣告され，生きる場のない馬たちを迎えに行ったりと大忙しの毎日です。

多くの人が自分の事で精一杯の世知辛い世の中で，こんな奇特な人物がいるのかと感銘を受けた私は，シロッコが無事に騎馬隊入りできた報告を兼ねて，ホーストラスト北海道へ向かいました。そこからまた新しい馬との出会いが生まれるのです。

日本海を見下ろす美しい岩内岳の懐に位置するホーストラスト北海道は，重賞を勝った功労馬や乗用馬を引退した馬たちが 30 頭ほど静かに暮らしています。病気やケガをしている馬や老馬を除き，年間を通して昼夜放牧が基本。広大な放牧地は，隣町の共和町にある分場など，いくつかのエリアに区切られ，セン馬と牝馬が一緒に放牧されているという珍しい繁養の仕方を取り入れています。馬たちが思い思いの場所で草を食み，仲良くくつろいでいる様子は，見ている者を幸せな気持ちにしてくれます。

大雨など天候の悪い日は，各放牧地に備え付けてある大型のシェルターで雨宿りをしたり，冬になると雪の好きな馬たちは，猛吹雪になってもシェルターに入らず雪の中を転げまわって楽しんだりと，それぞれの「馬生」を自由に過ごしています。

ホーストラストに通いつめていたある日，宮城県の乗馬クラブから到着したばかりの馬がいました。津波にのまれ，大けがをしながらも一命を取り留めたアド

マイヤチャンプ（1997年3月生まれ，父ノーザンテイスト）です。瞳の大きなその馬は，一生に一度あるかないかという恐ろしい記憶を持ったまま岩内に辿り着き，当初は水を怖がっていました。

私はチャンプとの出会いも勝手に運命だと思い込み，毎月3千円の飼い葉代で余生を支えるスポンサーになりました。

ホーストラスト北海道の馬たちは，ダイタクバートラム（2004年のステイヤーズステークス優勝）やヤマニンキングリー（2009年の札幌記念優勝）などの重賞を勝った功労馬と，チャンプのように競走馬引退後は乗用馬になり，乗馬クラブを離れた馬や，助成金対象外の馬たちがいます。1頭の馬に対し，毎月の飼い葉代約3万円を数名の人が支えるスポンサーシステムになっており，助成金の出る馬は3〜4名，対象外の馬は10名ほどのスポンサーがいます。

毎月3千円といえば，居酒屋の飲み放題1回分より安いということに気が付いた私は，―2回行かなきゃいいことだと，もう1頭，脚に金具が入っていることで乗用馬になれなかったパッションダンス（2016年の新潟大賞典優勝）のスポンサーにもなりました。馬たちが安心して余生を暮らすことに，少しでも役立てることが嬉しかったのです。

春夏秋冬，四季折々。時々，チャンプのいる岩内本場やパッションのいる共和町の分場を訪れては，放牧地の中に一緒に入ってふれあいを楽しんでいます。もう二度と鞍を乗せることのない背中を撫でて慈しみ，大自然の風景に溶けこむ馬たちの姿を眺める。馬たちのおかげで，実に健康的なライフワークを獲得できました。

愛馬たちの終の棲家を求めて

1984年。馬産地の浦河町で競走馬の生産をしていた大井昭子さんが，引退馬の牧場を創設したのが初めてだといわれていますが，「馬にも余生がある」という思いがまだまだ理解してもらえなかった頃の話であり，先駆者には風当たりが強かったことだろうと思います。「女だてらに生意気な…」ということもあったのでしょうか，その後，馬産地では引退馬の牧場は数件あるかないかにとどまっていたようです。

時は流れ，昭和から平成，そして2019年5月には令和の時代に移りました。オグリキャップの活躍を期に競馬を楽しむ女性ファンが増え，贔屓の馬たちが引退後どうしているかを見守る目が大きく変化し始めます。馬のためにならないようなことをすれば，厳しい目にさらされる世の中になり，平成に入った頃，とりわけ引退後の道筋は，欧米諸国のよい所を取り入れるようになったように思います。

この一連の流れが，日本全国に引退馬の牧場が増えた要因の1つと考えますが，JRAの角居勝彦調教師が2013年に引退馬を乗用馬にリトレーニングする一般財団法人ホースコミュニティを立ち上げたことは大きな

体調を崩して乗馬クラブからやってきたヤマニンキングリー。
ここでゆっくりと静養してから馬体もふっくら。表情も穏やかになり友だちもできました。

2017年にホーストラスト北海道に入厩したパッションダンス。
中央競馬時代に所属していた友道厩舎のご尽力で余生牧場入りができました。

冬のホーストラスト北海道・共和町分場の風景。好きな時に食べられる干し草は，運動不足にならないように，放牧地の中に点在させています。

起爆剤になりました。競馬界の裾野に大勢いるファンが結集し，馬のスポンサーになることで余生を支える仕組みができたのです。

リトレーニングした馬は乗用馬やセラピーホースになり，競走馬にとって新たな活躍の場が広がることは前進です。しかし，ここでも新たな世界で仕事を全うした後の生きる道はあるのかという話が持ち上がるわけです。

ホーストラスト北海道のような，完全に余生を支えることを目的とした牧場は全国に数件しかありません。馬の世界は慢性的な人材不足もあり，資金が集まっても働く人がいないこともあります。

令和の意味は「Beautiful Harmony」。美しい調和の時代の幕開けです。生産から育成，レース。そしてセカンドキャリアを終えて余生に入るまで，これらすべてを合わせたものが，進化した競馬界の形だと信じています。多くの人々を感動させ，大いに楽しませてくれた競走馬たちに，最後まで感謝の気持ちを込めることができたら，どんなに素敵なことでしょう。

人のために命を削り，仕事を終えた馬たち全頭が余生牧場に辿り着ける，美しい時代が来るよう，いとしの愛馬たちの健康と幸せを祈りながら，これからも地道に活動をしてまいります。

Journal of Equine Science

Vol. 30, No. 4 December 2019

和 文 要 約

原 著

交配前後の重輓馬における子宮内貯留液と子宮頸管の細菌の関係――千葉暁子[1,3]，氏家由伽理[1]，滄木孝弘[1-3]（[1]帯広畜産大学 臨床獣医学研究部門，[2]帯広畜産大学グローバルアグロメディシン研究センター，[3]岐阜大学大学院 連合獣医学研究科）…… 75

種牡馬による交配は，健康な牝馬であっても子宮内膜に炎症を引き起こすが，交配後1～2日で消失する。交配後12時間を経過しても認められる明らかな子宮内貯留液（IUF）は持続的な炎症や細菌の増殖，受胎能の低下を引き起こす可能性があることが報告されている。本研究は，交配前後における超音波画像診断装置を用いてIUFをスコア化し，子宮頸管内の病原性細菌の検出率との関連性を明らかにすることを目的とした。牝馬を3つのグループに分類した。超音波検査において子宮の内腔に何も認められない場合をGrade 1（G1），少量のIUF（直径0.5 cm未満）または内腔にエコージェニックなラインを認める場合をGrade 2（G2），明らかなIUF（直径0.5 cm以上）を認める場合をGrade 3（G3）とした。発情期で交配前の牝馬において，G1，G2およびG3の細菌検出率は，それぞれ15.8％（n＝6/38），25.9％（n＝7/27）および31.8％（n＝14/44）であり，群間に有意な差はなかった。排卵後（交配後12～72時間）の牝馬において，G1，G2およびG3の細菌検出率は，それぞれ18.2％（n＝2/11），56.1％（n＝23/41）および72.3％（n＝34/47）であり，G1と比較してG2（$P<0.05$）およびG3（$P<0.01$）で有意に細菌検出率が高かった。交配後の結果から，明らかなIUFを有する牝馬だけでなく，子宮内腔に少量のIUFやエコージェニックなラインが観察される牝馬においても，持続性交配誘発性子宮内膜炎のリスクがあることが示唆された。

側頭舌骨関節症を発症した日本のサラブレッド種11症例における，症状，治療およびサク癖との関連性――齋藤芳裕[1]，天谷友彦[1]（[1]大和高原動物診療所）…… 81

この側頭舌骨関節症11症例の回顧的研究は，本疾病に関する報告が日本で少ないことから，その病態，治療法およびサク癖との関連性を評価するために調査された。側頭舌骨関節症と診断されたサラブレッド11症例に関してカルテよりデータを集め，症例の詳細，症状，検査，治療および結果をまとめた。症例のサク癖の有無についてはカルテの病歴よりデータを得られた。11頭のうち，7頭は喉嚢内視鏡検査および頭部レントゲン検査において，2頭は喉嚢内視鏡検査のみ，2頭は頭部レントゲン検査のみによって診断された。8頭が内科的に治療され，3頭が外科的治療として角舌骨摘出術を受け，治癒率はそれぞれ37.5％，66.7％であった。11頭のうち8頭（73％）がサク癖を示しており，側頭舌骨関節症を発症した馬とサク癖をする馬の間に有意な関連があった。また，サク癖をしている馬が，母集団437頭と比べて側頭舌骨関節症を発症したオッズ比は12倍であったことから，サク癖は側頭舌骨関節症における危険因子であることが示唆された。

ダイナミックガス混合による低酸素下および高酸素下における間接熱量測定法を用いた酸素摂取量の測定――Eric K. BIRKS[1]，大村 一[2]，James H. JONES[3]（[1]Equine Sports Medicine Consultants，[2]日本中央競馬会競走馬総合研究所，[3]School of Veterinary Medicine, University of California, Davis）…… 87

運動生理学において，異なる酸素濃度下におけるガス交換を測定することは重要である。運動中の馬など，大動物の間接熱量測定に必要な高定常流を使用するには混合ガスのための非常に大きなバッグが必要であり，定常状態のための十分な平衡時間を制限する要素となっている。混合ガスバッグを必要としないダイナミックガス混合による開放回路系の間接熱量測定法について，マスバランス窒素希釈法を用いた理論上の精度について確認した。そのため，本研究はサラブレッドを用いて2種類の明らかな最大下運動時の酸素摂取量を異なる吸入酸素濃度下において測定することによりその測定精度について検討した。サラブレッドは19.5％，21％および25％の酸素下において24％と50％最大酸素摂取量の運動強度で運動した。窒素希釈法により酸素摂取量を測定し，分散分析により異なる吸入

酸素濃度間の酸素摂取量の差について検討した。最大下運動時において，3種類の吸入酸素濃度による酸素摂取量には差は認められなかった。これらのことから，信頼度のある酸素摂取量が異なる吸入酸素濃度下においてダイナミックガス混合と窒素希釈法を用いた較正による間接熱量測定法により測定することができた。

日本のサラブレッド競走馬における浅屈腱炎発症の危険因子の解析――池田耀子[1]，石原章和[1]，中嶋将彦[2]，山田一孝[1]（[1]麻布大学獣医学部，[2]東京都特別区競馬組合）…… 93

浅屈腱炎は競走馬に好発する疾患である。カルテ情報から浅屈腱炎症例馬を抽出し，浅屈腱炎発症の危険因子を解析した。馬場関連の危険因子として，不良馬場では良馬場よりも浅屈腱炎発症のオッズ比が有意に高かった。また，レース関連の危険因子として，着順10着より悪かった馬，着差2馬身以上で負けた馬，短距離のレースの出走，8番人気より悪かった馬で，浅屈腱炎発症のオッズ比が有意に高かった。さらに，馬関連の危険因子として，症例馬群の方が対照馬群よりもレース出走時の平均体重は有意に重かった。前レースから体重が減少していた馬の浅屈腱炎発症のオッズ比は有意に高かった。競走歴関連の危険因子として，競走距離が短いと，浅屈腱炎発症のオッズ比も有意に高かった。浅屈腱炎発症を予防するために，不良馬場では騎手はコース取りに気をつけるべきである。また，可能であれば，距離が長く遅いレースを選択することで浅屈腱炎発症のリスクを下げることができるかもしれない。馬の体重減少，出走間隔，病歴が浅屈腱炎発症リスクに及ぼす影響について，サンプル数を増やした更なる研究が必要である。

短　報

1頭の種雄馬におけるペニスの類肉腫の外科的治療―― Aram SAADI[1], Saeed AZIZI[2], Amir-Abbas FARSHID[3] and Alireza YOUSEFI[2] ([1]Department of Clinical Pathology and Internal Medicine, Faculty of Veterinary Medicine, Urmia University, Urmia 5756151818, Iran, [2]Department of Surgery and Diagnostic Imaging, Faculty of Veterinary Medicine, Urmia University, Urmia 5756151818, Iran, [3]Department of Pathobiology, Faculty of Veterinary Medicine, Urmia University, Urmia 5756151818, Iran)…… 99

4歳のクルド（Kurdish）種種雄馬のペニスの裂傷に由来したペニスの類肉腫の外科的治療と繁殖への影響について報告する。ペニスの遠位端に大きな肉芽ができ，尿道開口部が偏向して，診察時には排尿困難であった。局所での浸潤や転移は認めなかった。全身麻酔下で，陰茎部分切除を行い，ペニスの遠位部を含めて摘出した。摘出塊の組織病理学的検査により線維芽性類肉腫であることが確認された。陰茎部分切除はペニスの類肉腫の治療法として成功し，術後の併発症もなく，長期の追跡においても腫瘍の再発はなかった。しかし，射精と精子採取は行えなかった。

Salacinol類の馬に対する効果と安全性評価――植田文教[1]，飯田篤史[1]，斎藤仁美[1]，関　忍[1]，天生聡仁[2]，山手寛嗣[2]（[1]富士フイルム株式会社バイオサイエンス＆エンジニアリング研究所，[2]富士フイルム株式会社高機能材料開発本部，[3]株式会社盛岡動物医療センター山手競争馬診療所）…… 105

Salacinolはデチンムル科のサラシア属植物に含まれる成分で，これまでヒトやラットで糖の吸収を抑え腸内細菌叢が改善する作用が報告されている。今回我々は馬におけるSalacinol含有粉末の腸内細菌叢に対する効果と安全性を検討した。馬での腸内細菌叢への影響を確認するため，健常馬11頭に対し，Salacinol含有粉末を1日Salacinol換算で10 mgを連続して2週間投与し，前後での腸内細菌叢の変化を評価した。投与前に対し，Salacinol含有粉末投与群では，腸内細菌叢が変化しLactobacillalesが有意に増加した。Lactobacillalesにはウマで有用であると報告されているLactobacillus属細菌が分類上含まれる。さらにFirmicutesとBacteroidetesとの比（F/B比）が増加していることが明らかとなった。Salacinolは小腸での二糖類の分解・吸収を一部抑えることから，吸収せず盲腸や大腸へ流れた二糖類が上記菌叢の変化を起こした可能性がある。上記メカニズムは，後腸のアシドーシスを促進する可能性が考えられるためSalacia reticulata extract（SRE）を3週間まで摂取した馬の糞便のpH変化を確認したが，サラシアサプリメント摂取によって糞便のpHの低下が見られないこと，セルロース分解菌を含むFirmicutesの細菌群が実際には増加していることから後腸アシドーシスを助長する可能性は低いと結論づけられた。また，有効量の5倍に相当するSalacinolを含むサプリメントを28日間投与し，生理学検査および血液学的検査を獣医師立ち合いのもと安全性確認試験を実施したが，特に問題となる所見はなく安全性に問題ないことが確認された。今回の結果は，Salacinolの投与により馬の腸内細菌叢が変化することとその際の安全性を示す最初の研究である。今後この細菌叢の変化がウマに及ぼす影響について調べる予定である。

お知らせ

ウマに関する海外渡航支援希望者の募集

日本ウマ科学会では，海外におけるウマ関連の学術的・文化的活動を目的に渡航する会員に対して，海外渡航支援事業内規に基づき，その経費の一部を支援しております。下記の募集要項のとおり，当該事業の支援対象者を毎年公募致しておりますので，支援を希望する会員は所定の方法によりご応募ください。

＜募集要領＞

支 援 目 的　：海外で開催されるウマの科学や文化等に関する学会への参加や学術的ならびに文化的調査等のために渡航する会員の経費の一部を会費の一部から支援し，国際交流の促進ならびに最新のウマ科学・文化情報の収集と共有化を図ることを支援目的とします。

支 援 対 象　：(1) ウマに関する学術，文化あるいは技術の情報交換を目的とする海外の諸行事への参加を目的とした渡航
(2) ウマに関する学術的並びに文化的調査等を目的とした渡航
(3) その他，本学会が必要と認めた渡航

応 募 締 切　：前期：11 月 1 日～翌年 4 月 30 日　締め切りは 9 月 30 日
後期：5 月 1 日～ 10 月 31 日　締め切りは 3 月 31 日

支 援 者 数　：前後期いずれも 2 名以内（自然科学系 1 名，文科系 1 名）

支　援　額　：1 件につき 10 万円

支援者の義務：この支援を受けた方は，参加した諸行事の内容あるいは調査した成果等を，本人顔写真およびプロフィール（200 字以内）とともに，帰国後 1 ヵ月以内に本学会和文誌『Hippophile』あるいは本学会機関誌『Journal of Equine Science』に投稿する義務があります（本文 3,000 ～ 15,000 字）。

応 募 方 法　：支援希望者は申請書に必要事項を記入の上，事務局へ送付してください（FAX・メール可）。

申請書（Word）は以下 URL よりダウンロード可能です。
http://jses.equinst.go.jp/common/sysfile/finder/files/app%281%29.docx

支援者選考　：申請内容を基に支援者を審査選考し，本人に連絡します。

問い合わせ先：日本ウマ科学会事務局（電話・FAX・メール可）

〒 329-0412　栃木県下野市柴 1400-4
JRA 競走馬総合研究所内・日本ウマ科学会事務局
TEL. 0285-39-7398　FAX. 0285-44-5676
e-mail: e-office@equinst.go.jp

様式１

海外渡航支援申請書

提出日　　年　　月　　日

日本ウマ科学会
会長　　殿

渡航者氏名（年齢）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿印
所属（職業を含む）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
住所　（電話，Fax ，E-mail を含む）
＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

1. 渡航目的：（学術集会，会議等に参加する申請者はその名称なども記入）

2. 渡航場所：　　（国名　　）
3. 渡航期間：　　年　　月　　日から　　年　　月　　日まで
4. 渡航理由：□学会発表　□学会聴講　□会議　□調査研究　□その他
5. 渡航費用：
   旅費　　□主催者および所属団体負担　□一部自己負担　□全額自己負担　□未定
   滞在費　□主催者および所属団体負担　□一部自己負担　□全額自己負担　□未定
6. 支援申請理由：

7. 渡航により期待される成果とウマ科学会への意義など
   ○
   ○
   ○
   ○
   ○

臨床委員会　DVD 販売のお知らせ

日本ウマ科学会臨床委員会では，過去に開催された臨床委員会主催の招待講演ならびに実習の DVD を販売しています。

＜お申し込み方法＞

以下の申込用紙をご利用いただくか，メールで事務局までお申し込みください。

＜価格および代金のお支払い方法＞

価格は 1 セット **3,000 円**（税込）です。

お申し込み後，折り返し合計代金をご連絡いたしますので，ご確認の上，下記口座まで代金をお振込みください。納金確認後，宅配便にてお送りいたします。なお，お手数ですが送料は受取人様払いでお願いいたします。

郵便振替口座　記号番号：00130-3-539393
または
ゆうちょ銀行（9900）　〇一九（ゼロイチキュウ）店　当座預金口座　539393
口座名：日本ウマ科学会（ニホンウマカガクカイ）

- キリトリセン -

申込用紙

ご希望の DVD と枚数	（1）2009 年（第 22 回学術集会）	Dr. Brooks	眼科	（　　）セット
	（2）2010 年（第 23 回学術集会）	Dr. Richardson	整形外科	（　　）セット
	（3）2011 年（第 24 回学術集会）	Dr. LeBlanc	繁殖	（　　）セット
	（4）2012 年（第 25 回学術集会）	Dr. Dyson	跛行診断	（　　）セット
	（5）2013 年（第 26 回学術集会）	Dr. White	急性腹症	（　　）セット
	（6）2014 年（第 27 回学術集会）	Dr. Scott	装蹄	（　　）セット
	（7）2015 年	Dr. Mama & Steffey	麻酔	（　　）セット
	（8）2016 年（第 29 回学術集会）	Dr. Ducharme	呼吸器	（　　）セット
	（9）2017 年（第 30 回学術集会）	Dr. Hyde	歯科	（　　）セット
お名前				
ご送付先住所				
ご所属				
電話番号				
メールアドレス				

連 絡 先：　日本ウマ科学会事務局
FAX：0285-44-5676　　e-mail：　e-office@equinst.go.jp
住所：〒 329-0412　栃木県下野市柴 1400-4　JRA 競走馬総合研究所

協賛団体名

団　体　名	〒	住　　所
日本中央競馬会	106-8401	東京都港区六本木 6-11-1　六本木ヒルズゲートタワー
地方競馬全国協会	106-8639	東京都港区麻布台 2-2-1　麻布台ビル

賛助会員名簿

（五十音順）

会　員　名	〒	住　　所
(株)アイペック	170-0002	東京都豊島区巣鴨 1-24-12　アーバンポイント巣鴨 4F
公益財団法人 軽種馬育成調教センター	057-0171	北海道浦河郡浦河町西舎 528
公益財団法人 競走馬理化学研究所	320-0851	栃木県宇都宮市鶴田町 1731-2
JRA システムサービス(株)	135-0034	東京都江東区永代 1-14-5　永代ダイヤビル 7F
JRA ファシリティーズ(株)	104-0032	東京都中央区八丁堀 3-19-9　ジオ八丁堀
公益財団法人 ジャパン・スタッドブック・インターナショナル	105-0004	東京都港区新橋 4-5-4　日本中央競馬会新橋分館 6F
公益財団法人 全国競馬・畜産振興会	105-0004	東京都港区新橋 4-5-4　日本中央競馬会新橋分館 3F
公益社団法人 全国乗馬倶楽部振興協会	105-0004	東京都港区新橋 4-5-4　日本中央競馬会新橋分館 5F
中央競馬馬主相互会	105-0004	東京都港区新橋 4-7-26　東洋海事ビル 3F
DS ファーマアニマルヘルス(株)	541-0053	大阪府大阪市中央区本町二丁目 5-7　大阪丸紅ビル 10 階
一般社団法人 日本競走馬協会	106-0041	東京都港区麻布台 2-2-1　麻布台ビル
公益社団法人 日本軽種馬協会	105-0004	東京都港区新橋 4-5-4　日本中央競馬会新橋分館 3F
一般財団法人 日本生物科学研究所	198-0024	東京都青梅市新町 9-2221-1
公益社団法人 日本装削蹄協会	105-0004	東京都港区新橋 4-5-4　日本中央競馬会新橋分館 7F
一般財団法人 日本中央競馬会弘済会	106-8401	東京都港区六本木 6-11-1　六本木ヒルズゲートタワー 9F
公益社団法人 日本馬事協会	104-0033	東京都中央区新川 2-6-16　馬事畜産会館 7F
公益社団法人 日本馬術連盟	104-0033	東京都中央区新川 2-6-16　馬事畜産会館 6F
一般財団法人 馬事畜産会館	104-0033	東京都中央区新川 2-6-16
文永堂出版(株)	113-0033	東京都文京区本郷 2-27-18

編集後記

騎馬の銅像は各地に散在しています。皇居外苑の楠木正成像は有名ですが，南麻布の有栖川宮記念公園にある有栖川宮熾仁親王像，北の丸公園の北白川宮能久親王像など，編集子の知っているものでも２つ３つはすぐあげられます。ただ，よく訪れる北の丸公園でも，設置されている騎馬像の馬は，何かに驚いたときの動きがよく表現されているとは思うものの，それ以上のことはわかりません。さて，このたび北海道から沖縄に至る各地の騎馬像 100 点以上を収録した『日本の騎馬像』が発刊されました。著者は本誌の編集委員でもある山口洋史氏。著者自らが設置場所に赴いて撮影した写真とともに，特徴，鑑賞のポイントなどの解説が加えられています。北の丸公園の馬は，「200 メートル後方に落ちた不発弾による砂塵に驚いた瞬間が表現されている」ということを，この本で初めて知りました。自費出版物ですが，エクイネットセレクトショップのネット通販を介して購入が可能です。

本号の最初の記事は高須正規さんたちによる学術論文「かつて木曽馬と過ごした木曽の人々における馬に対する思い」です。木曽馬とともに生活していた地域の人々へのインタビューを重ね，考察を加えたもので，貴重な記録といえるでしょう。

フランス，ペルシュロン地方在住の親日家，ヴァージニア・クユミジャンさんには「ヨーロッパにおける重種馬」という題で，現在のヨーロッパにおける様々な品種の重種馬の現状について書いていただきました。現代社会に合った重種馬の活用の道を開くことで，歴史ある貴重な品種の消滅をまぬがれることができるでしょう。また具体的な活用例は，日本の馬の利活用にもヒントを与えてもらえます。

小林　廉さんたちによる「軽種馬生産の推移と展望」は過去半世紀の日本における軽種馬生産の推移を分析したものです。推移の背景にある社会環境の変化をもとに考察を加えています。

馬時往来は上坂由香さんに「いとしの引退馬たち」と題して書いていただきました。役割を終えて余生を送る幸せな馬たちの話です。

（編集委員長　楠瀬　良）

入会申し込み方法

下記宛にお申し込み下さい。年会費は 5,000 円（国内）です。

日本ウマ科学会事務局
〒 329-0412　栃木県下野市柴 1400-4
JRA 競走馬総合研究所内
電話 0285-39-7398　FAX 0285-44-5676
E-mail：e-office@equinst.go.jp

Hippophile, No. 79, 2019

2019 年 12 月発行

http://jses.equinst.go.jp/

編集委員長：楠瀬　良
発　行　者：青木　修
〒 329-0412　栃木県下野市柴 1400-4
JRA 競走馬総合研究所内
電話　0285-39-7398　FAX　0285-44-5676
郵便振替口座番号　00130-3-539393
または
ゆうちょ銀行（9900）〇一九（ゼロイチキュウ）店
当座預金口座　539393
口座名：日本ウマ科学会（ニホンウマカガクカイ）
印刷者：株式会社　アイペック
〒 170-0002　豊島区巣鴨 1-24-12
電話　03-5978-4067